月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.123

クロスベルを訪れたルーファスたちが目にしたものとは
創の軌跡
THE MISERABLE SINNERS

新年度にあわせてあのキャラが制服姿を披露！
『英雄伝説 暁の軌跡』

『軌跡』シリーズ始まりの
物語を振り返る
英雄伝説 空の軌跡

ラッピィ暗殺計画、始動!?
も～っと集まれ！
ファルコム学園

ファルコムニュース



英雄伝説

緊迫の対峙を終えたクローゼ一行にまさかの再会が訪れる

空の軌跡SC～絆の在り処～



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

★今回はいろいろと"ぶっそうな"キャラがぞくぞく★





結果と原因



血の臭い



教えて暗殺者



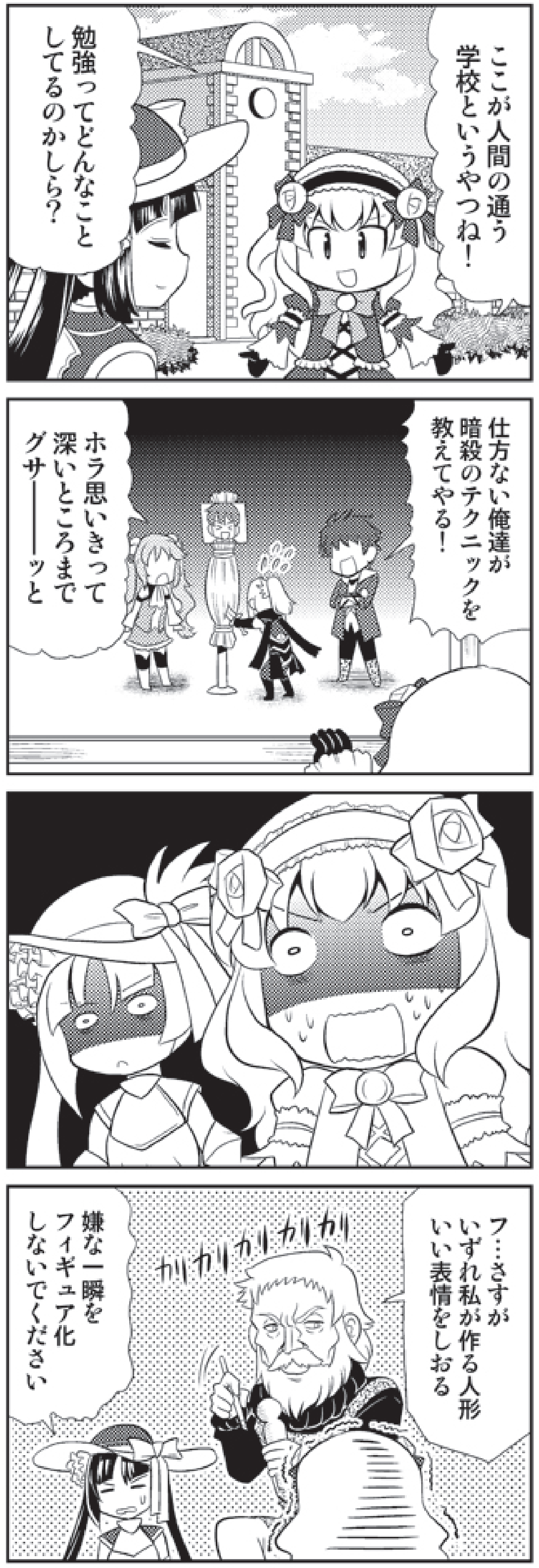
できないこと



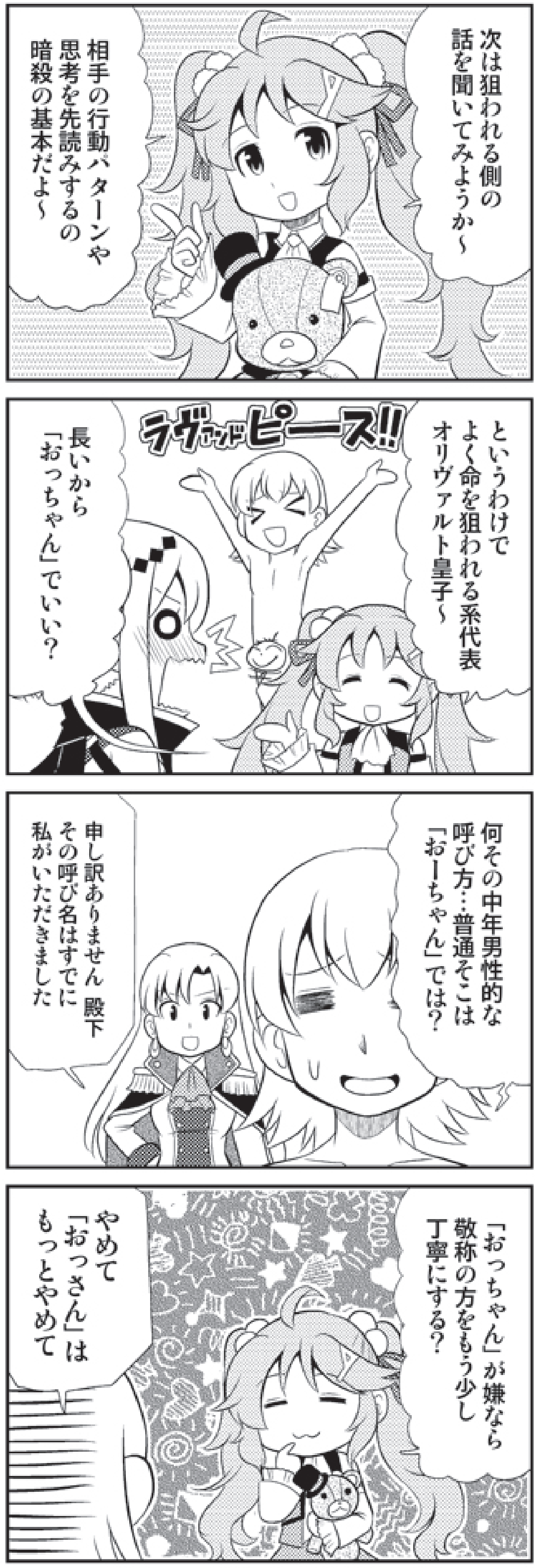
イリスの化けの皮



あこがれの学校



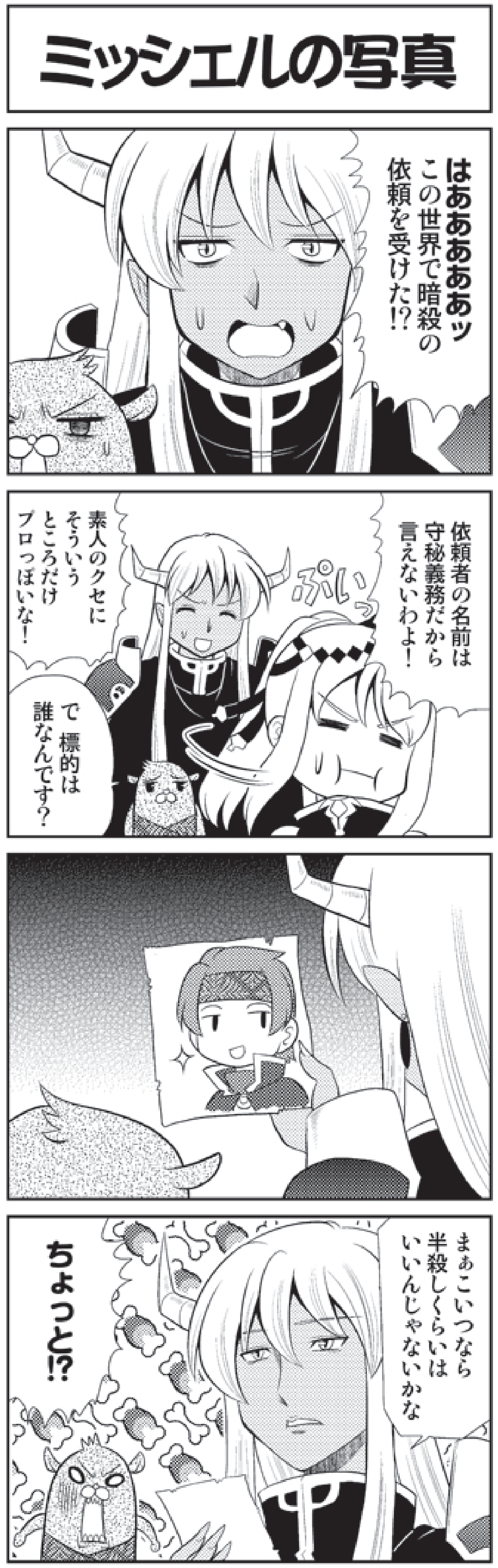
おっちゃんを狙え

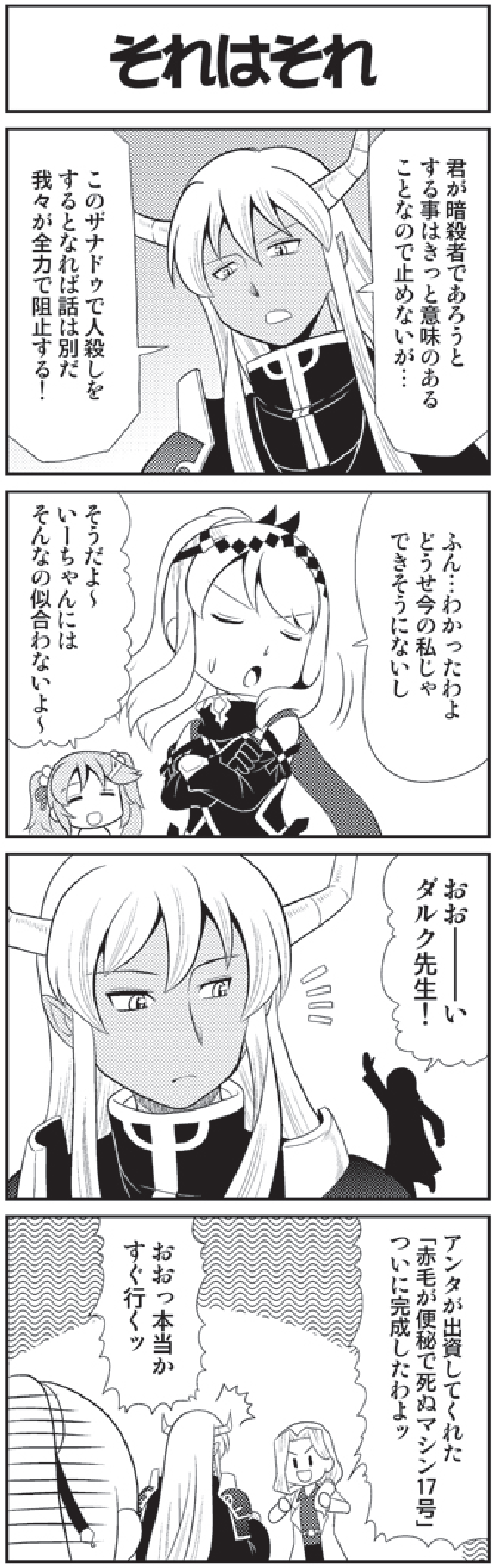


鉄血宰相の弱点




覚 悟
それにしてもなぜ暗殺者なんかに…？
……
まぁ言いたくないならかまわんが…君からは「覚悟」が感じられなくてね
覚悟…？
自分の目的のために他人の人生を終わらせたという後悔と――
そしてその人の家族や友人の悲しみや怒りを一生背負ってゆく覚悟…だな
えっなになにそれ誰のこと？
うるさいなーあっち行ってなさいよ!!


ミッシェルの写真
はあああああッ この世界で暗殺の依頼を受けた!?
依頼者の名前は守秘義務だから言えないわよ！
ぷいっ
素人のクセにそういうところだけプロっぽいな！
で 標的は誰なんです？
まぁこいつなら半殺しくらいはいいんじゃないかな
ちょっと!?


それはそれ
君が暗殺者であろうとする事はきっと意味のあることなので止めないが…
このザナドゥで人殺しをするとなれば話は別だ 我々が全力で阻止する！
ふん…わかったわよ どうせ今の私じゃできそうにないし
そうだよ～ いーちゃんにはそんなの似合わないよ～
おお――――い ダルク先生！
アンタが出資してくれた「赤毛が便秘で死ぬマシン17号」ついに完成したわよッ
おおっ本当か すぐ行くッ


種の見分け
貴様ッ 遅いと思ったら何をのんきに標的としゃべっているッ!?
バッ
標的…ってラッピィのこと？ 写真と全然違うわよ
あなたでしたか…
何を言うッ そのものではないか！
そうか 魔王ガルシスは人間と種が違いすぎるから個体の見分けが苦手なのでは？
アリムシ
レイリムシ
例えば我々だって同じ種類の虫を見ても見分けがつかないでしょ
つくわよ？
そうだね エステルは黙ってようね



穏やかで騒がしい生活が戻ってきたファルコム学園。
徐々に英雄、戦士、さらには曲者までが還ってくるなか、
新たに「イースⅨ」のキャラクターも参戦！
まだまだ止まらない異能・新久保だいすけの筆が冴え渡る！

おまたせ！待望の第2巻だよ！

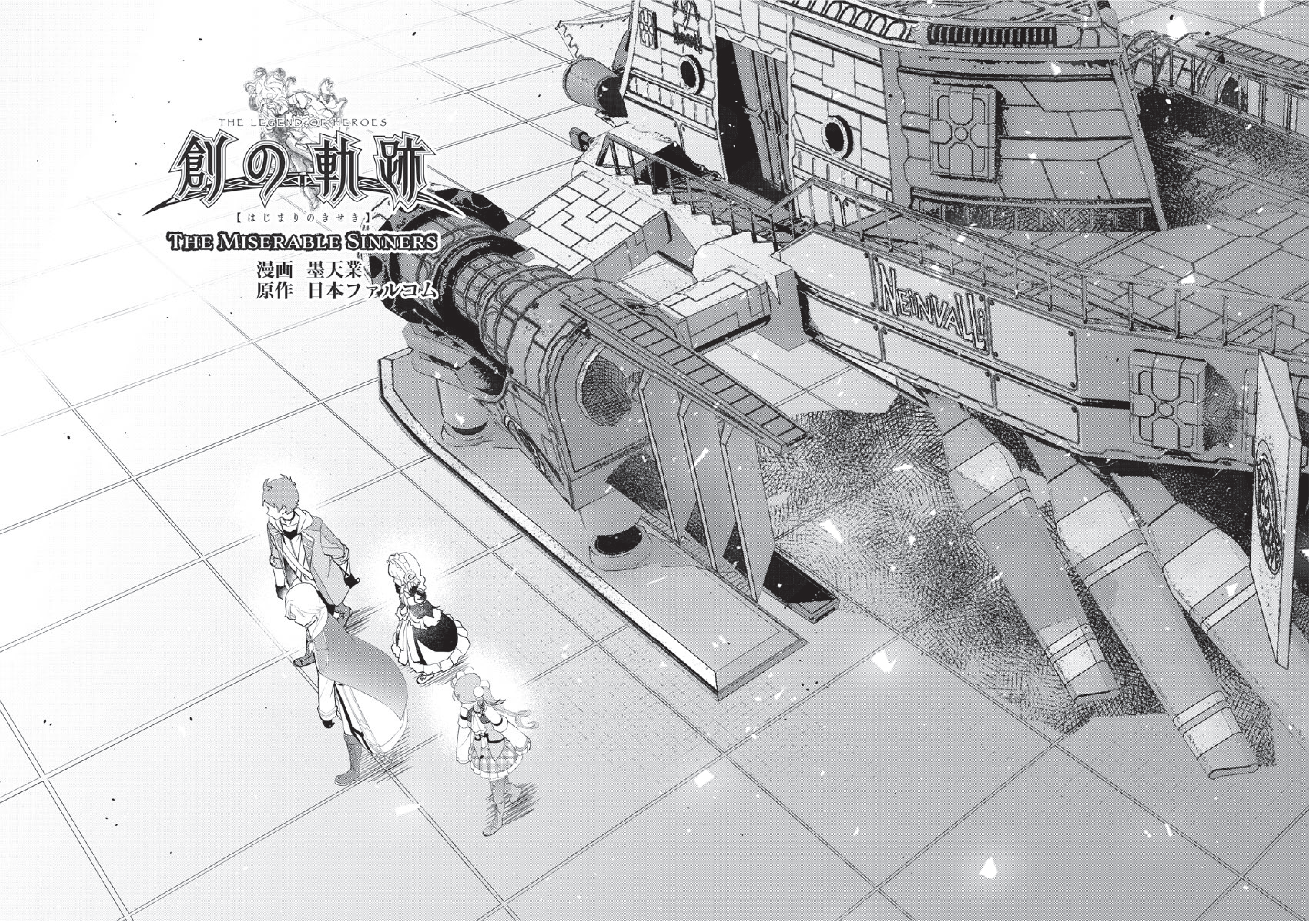


も〜っと集まれ！
ファルコム学園②

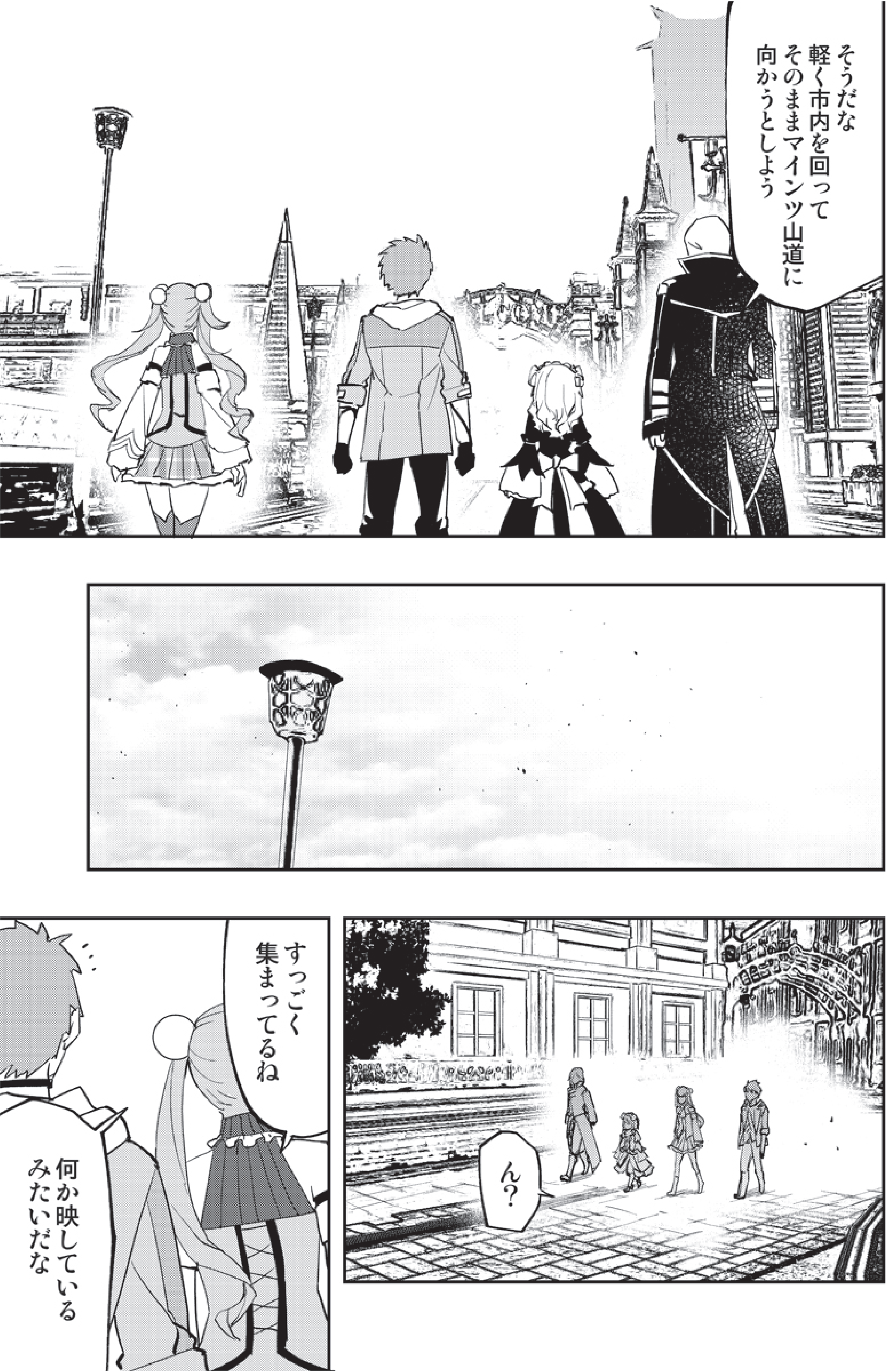
新久保だいすけ

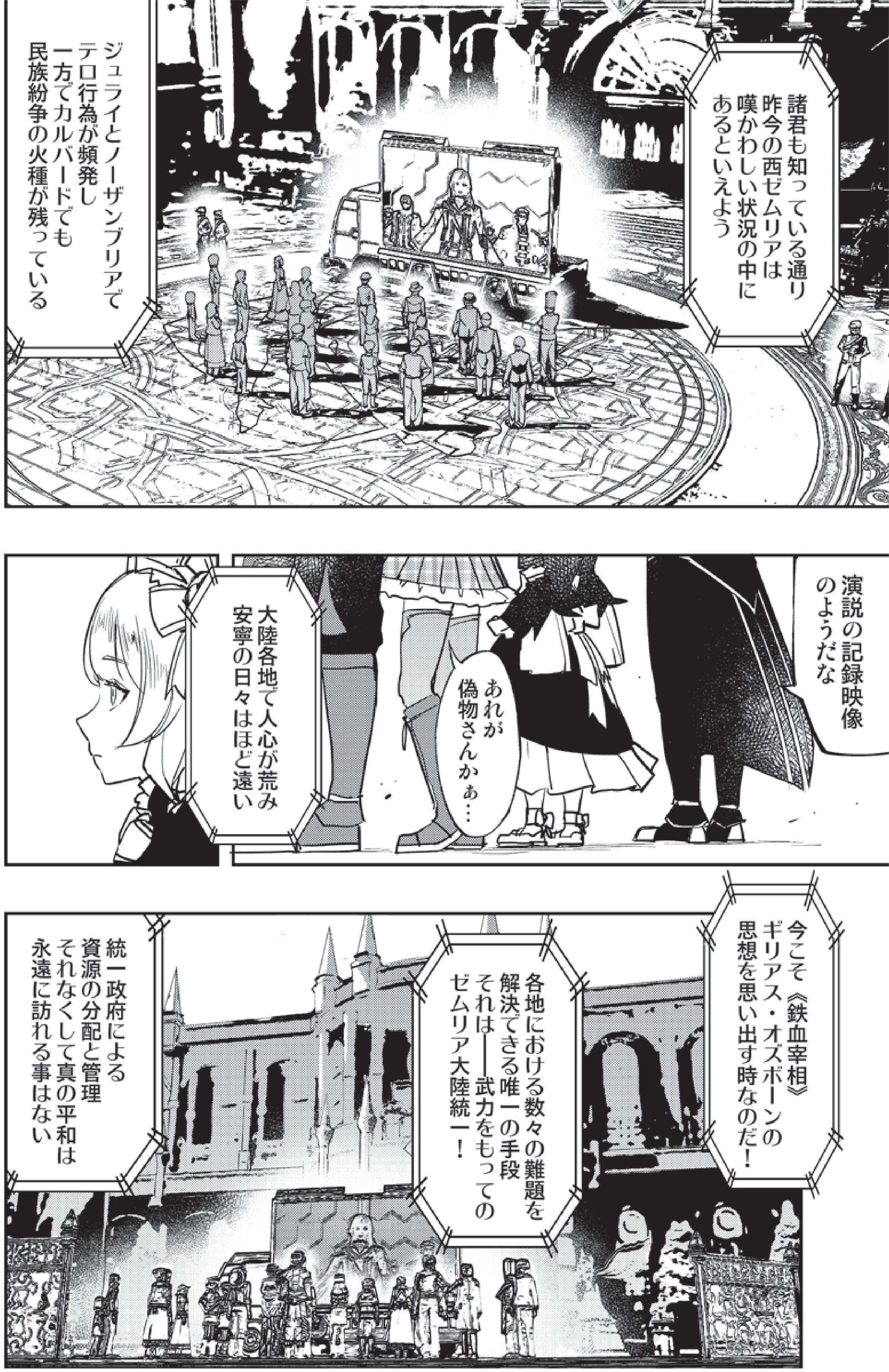
定価：本体 900 円＋税
ISBN 978-4-8021-3213-8

発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp/falcombooks


THE LEGEND OF HEROES
創の軌跡
【はじまりのきせき】
THE MISERABLE SINNERS
漫画 墨天業
原作 日本ファルコム


まさか自分の偽者のフリをするとはな
あはは笑える～
いや一周回ってむしろ尊敬するかも？
彼らは優秀だ すぐにでも連絡が総統府へ行き 私を「偽物」だと断じて追ってくるだろう
その前にここを出るとしよう
せっかくだし市内の状況もちょっと偵察していこうか？

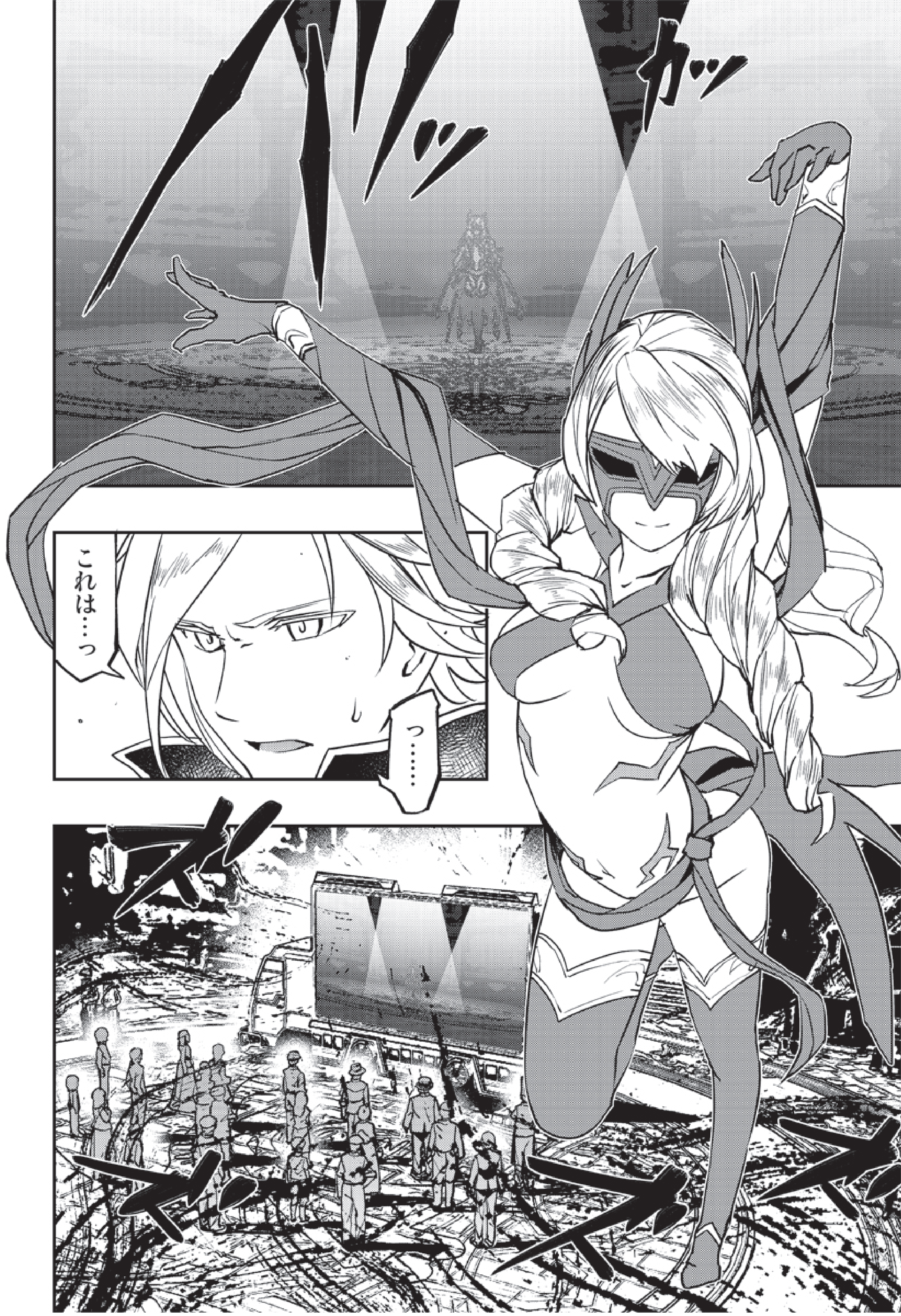

そうだな 軽く市内を回って そのままマインツ山道に向かうとしよう
ん？
すっごく集まってるね
何か映しているみたいだな



諸君も知っている通り 昨今の西ゼムリアは 嘆かわしい状況の中に あるといえよう
ジュライとノーザンブリアで テロ行為が頻発し 一方でカルバードでも 民族紛争の火種が残っている
演説の記録映像のようだな
大陸各地で人心が荒み 安寧の日々はほど遠い
あれが 偽物さんかぁ…
今こそ《鉄血宰相》ギリアス・オズボーンの 思想を思い出す時なのだ！
各地における数々の難題を 解決できる唯一の手段 それは――武力をもっての ゼムリア大陸統一！
統一政府による 資源の分配と管理 それなくして真の平和は 永遠に訪れる事はない



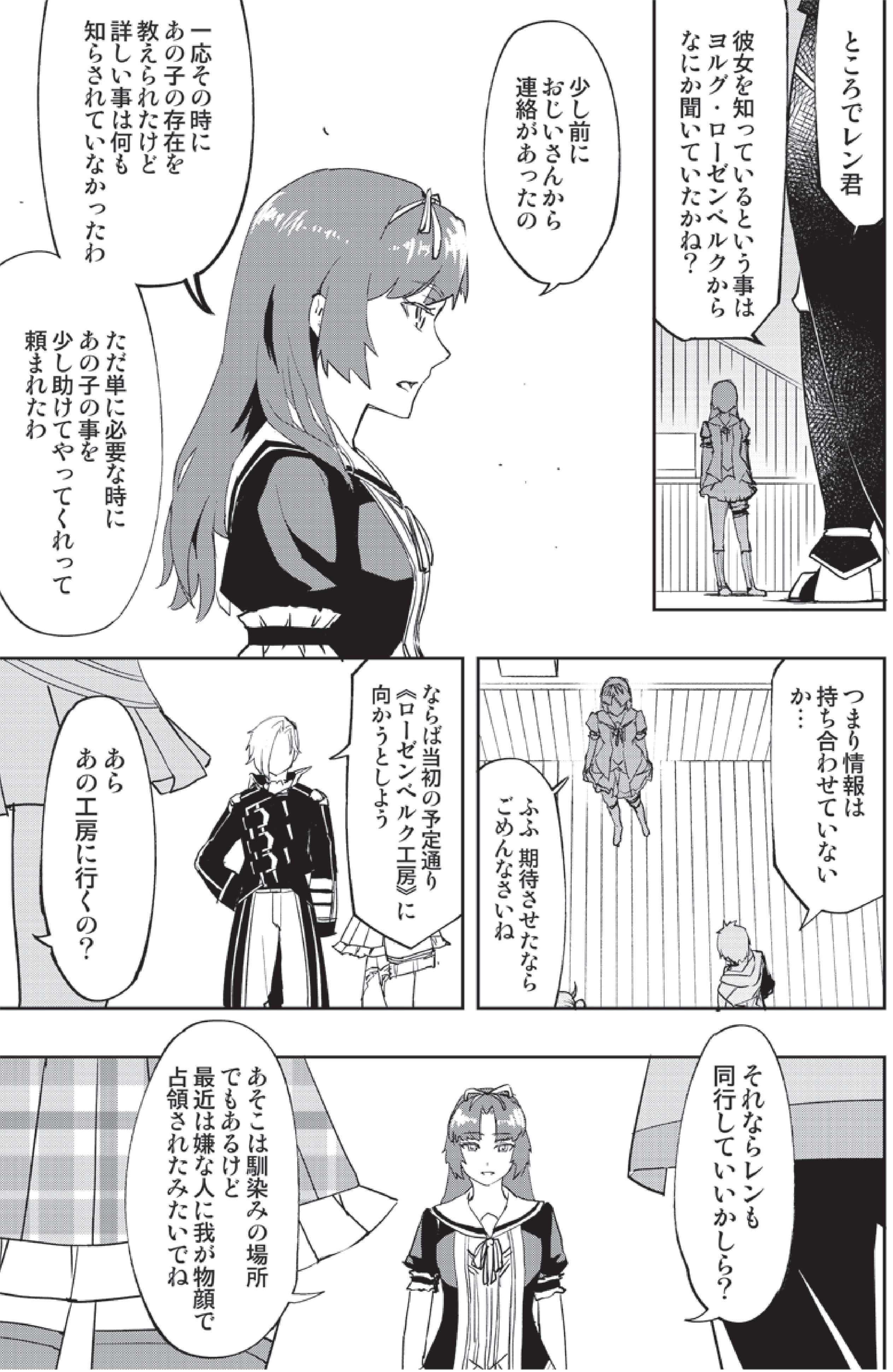
私――ルーファス・アルバレアは 必ずや偉大なる 《鉄血宰相》の後継者として 二大国を含めた 大陸諸国の統一を成し遂げよう！
これは 恒久平和へと進むための 人類の進歩と繁栄を 賭けた戦いである 今度こそ大陸を ひとつにするのだ 世界を――！
各国には賛同と協力を 求めるつもりだが 応じなければ その傲慢の代償として 裁きが下る事になるだろう
そんな… 大陸統一なんて…
やっぱり テロリスト じゃないか！
市民からの反発は やっぱりあるね…
でも意外だな もっと言論統制を するものかと思った…
？
すーちゃん見て！ 映像が――

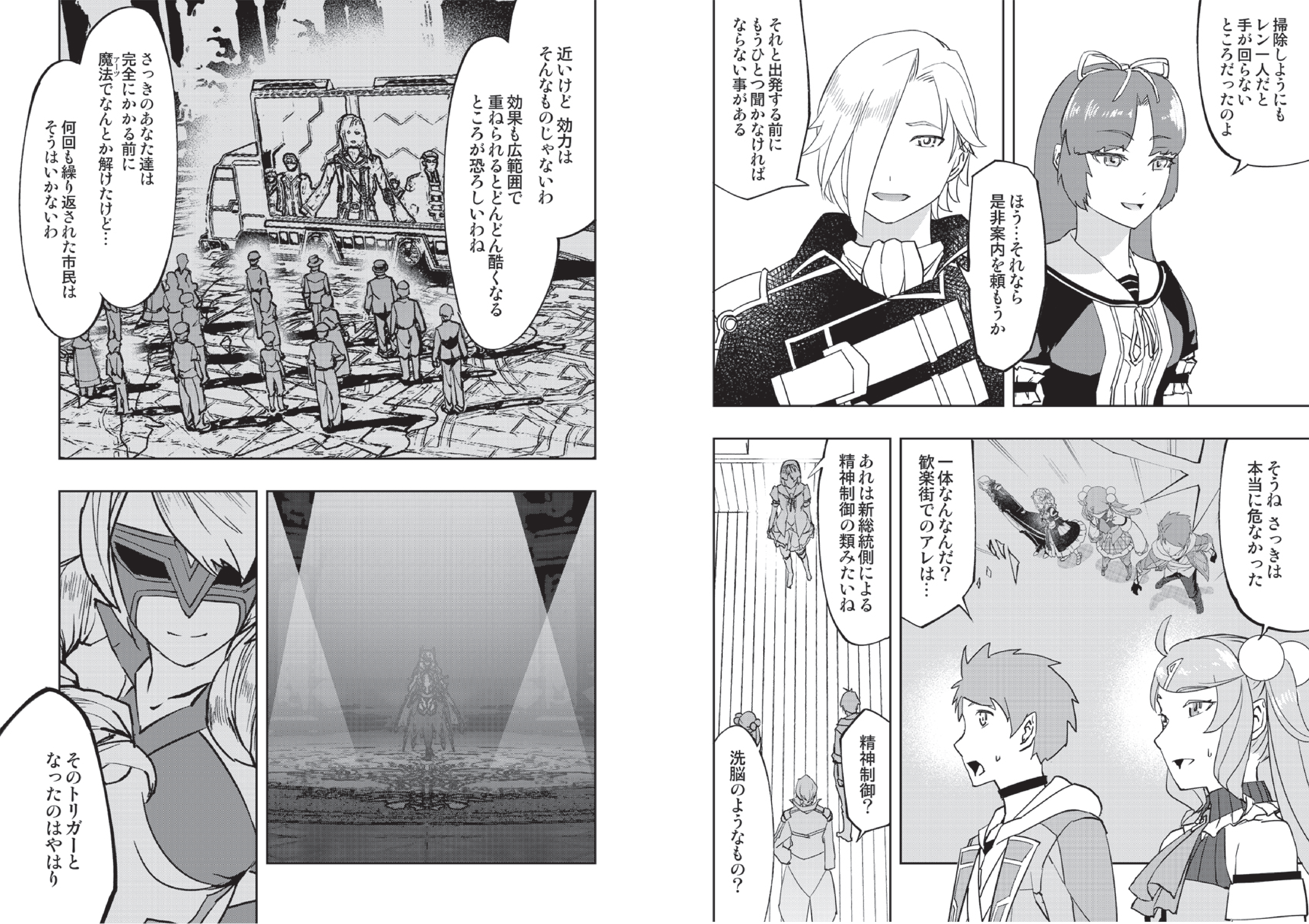

カッ
これは…っ
っ……

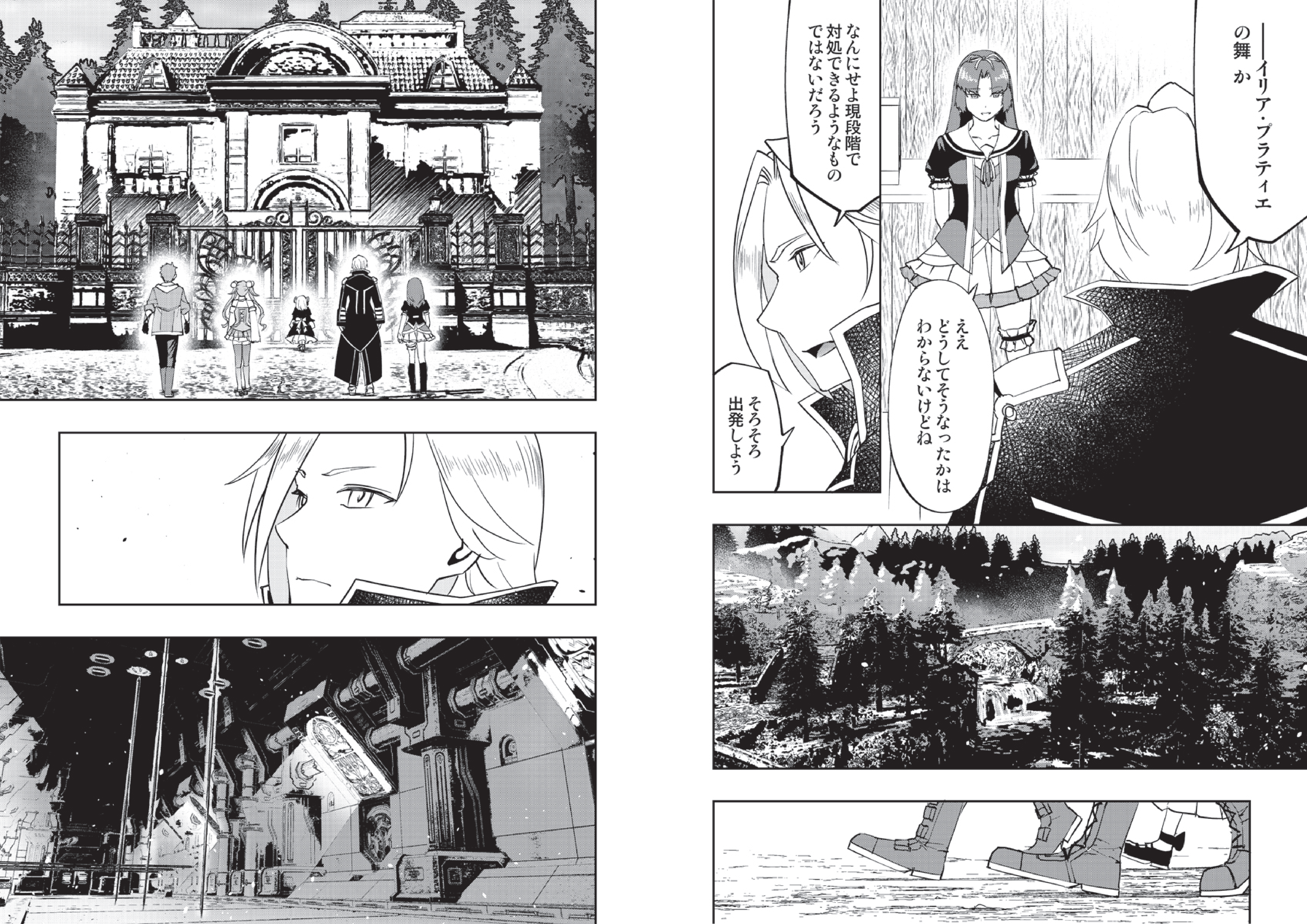

?
どうしたの?
レキュリア

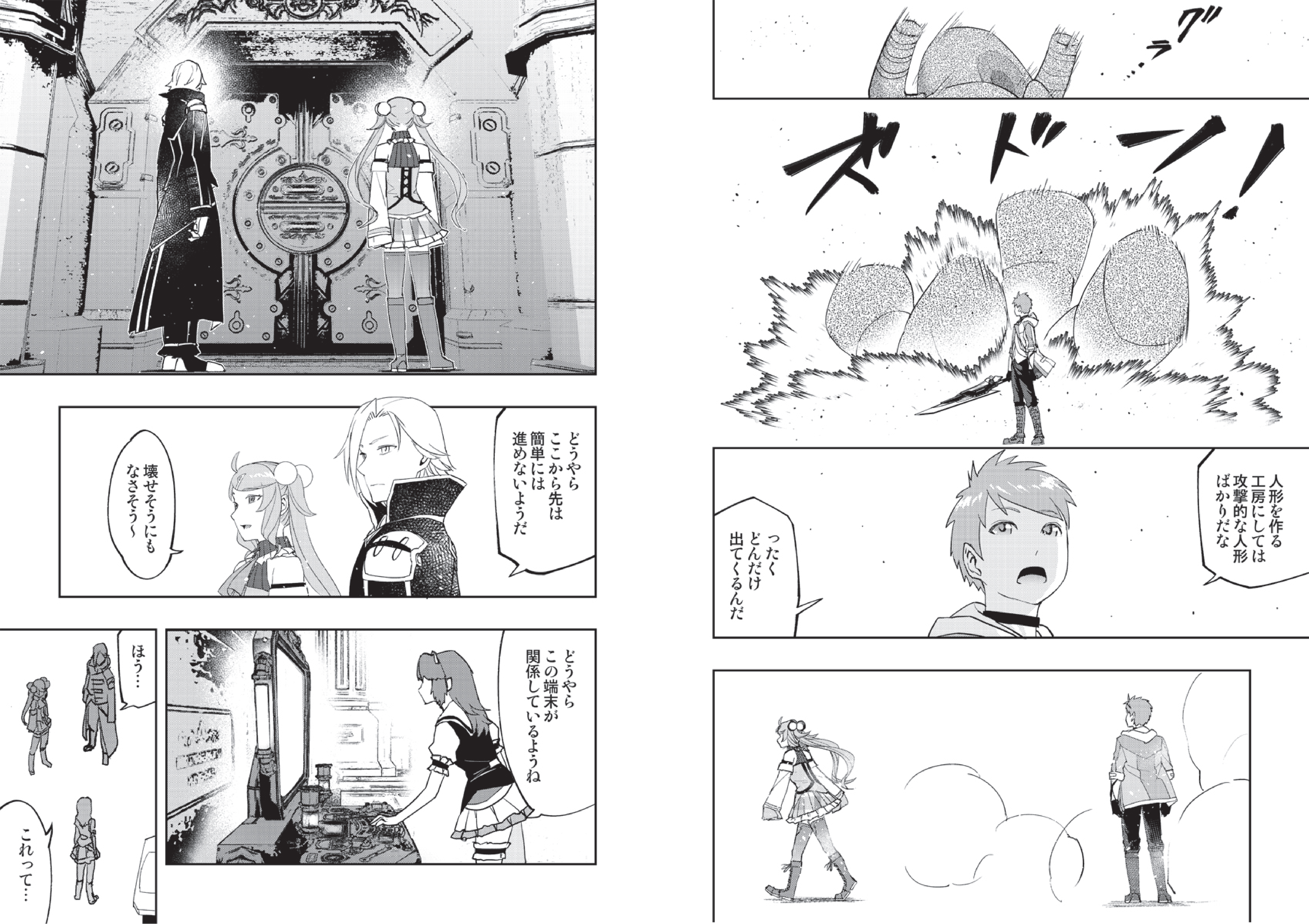

ヒュオーン…
こっちよ!
うわぁ～ ラーちゃんの お仲間がたくさん～
ふん これでも ローゼンベルクとしての 矜持があるの
そこいらの人形と 一緒にしないで欲しいわ
Antique Shop Imelda
あら その中にも ローゼンベルク工房の 人形があるわよ
え ほんと?


ああ！ホントだ!!
この完璧な造形
間違いない！
……
さて まずは
礼を言おう
《殲滅天使》――いや
レン・ブライト君
あの総統さんは怪しいと
思っていたけれど
こういう事だったのね
話が早くて
助かる 確か君は
ヨルグ老人の
関係者だったな？
え？
そうなのか？
ええ
おじいさんには
昔お世話に
なっていてね
なるほど
なーちゃんたちと
同じだね～


ところでレン君
彼女を知っているという事は
ヨルグ・ローゼンベルクから
なにか聞いていたかね？
少し前に
おじいさんから
連絡があったの
一応その時に
あの子の存在を
教えられたけど
詳しい事は何も
知らされていなかったわ
ただ単に必要な時に
あの子の事を
少し助けてやってくれって
頼まれたわ
つまり情報は
持ち合わせていない
か…
ふふ 期待させたなら
ごめんなさいね
ならば当初の予定通り
《ローゼンベルク工房》に
向かうとしよう
あら
あの工房に行くの？
それならレンも
同行していいかしら？
あそこは馴染みの場所
でもあるけど
最近は嫌な人に我が物顔で
占領されたみたいでね


掃除しようにも
レン一人だと
手が回らない
ところだったのよ
ほう…それなら
是非案内を頼もうか
それと出発する前に
もうひとつ聞かなければ
ならない事がある
そうね さっきは
本当に危なかった
一体なんなんだ？
歓楽街でのアレは…
あれは新総統側による
精神制御の類みたいね
精神制御？
洗脳のようなもの？
近いけど 効力は
そんなものじゃないわ
効果も広範囲で
重ねられるとどんどん酷くなる
ところが恐ろしいわね
さっきのあなた達は
完全にかかる前に
魔法(アーツ)でなんとか解けたけど…
何回も繰り返された市民は
そうはいかないわ
そのトリガーと
なったのはやはり

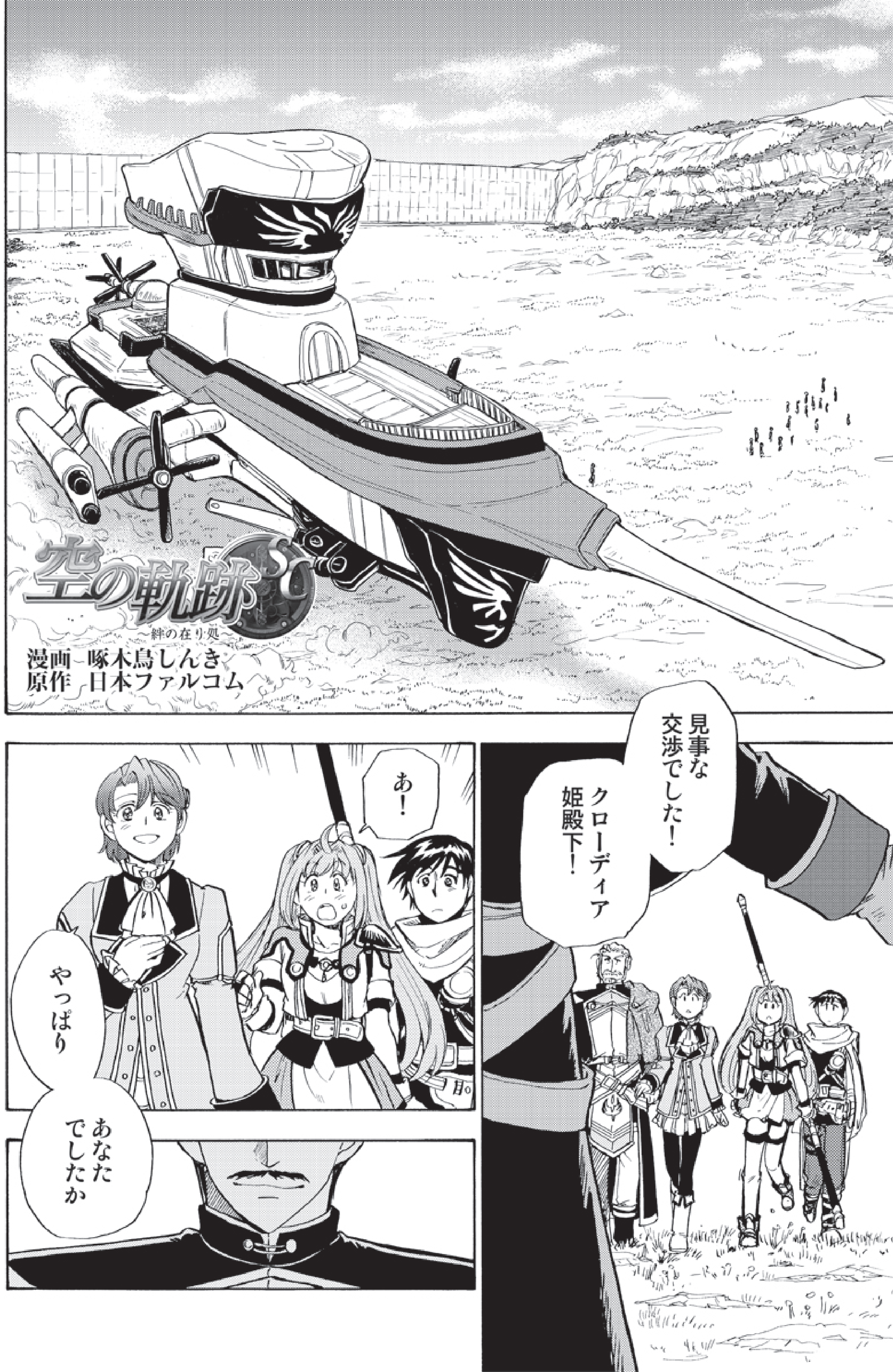

――イリア・プラティエの舞か
なんにせよ現段階で対処できるようなものではないだろう
ええ どうしてそうなったかは わからないけどね
そろそろ出発しよう



…ラグ
ズドン!
人形を作る工房にしては攻撃的な人形ばかりだな
ったくどんだけ出てくるんだ
どうやらここから先は簡単には進めないようだ
壊せそうにもなさそう～
どうやらこの端末が関係しているようね
ほう…
これって…


『英雄伝説 閃の軌跡』のアリサたちが魔法少女に!?
脚本家・山下憲一（TV アニメ『みんな集まれ！ファルコム学園』）と漫画家・さがら梨々（コミック『閃の軌跡』）の強力タッグが贈るシナリオブックが登場！　平穏な日常に突如現れた怪物。その時、アリサのキーホルダーが不思議な光に包まれて……!?
あなたにお届け！
愛と希望の流れ星！
魔法少女
まじかる☆アリサ
決定稿
著：山下憲一
イラスト：さがら梨々
原作：日本ファルコム
好評発売中！
判型：A5正寸／ページ数：160／定価：1,300円（税別）／ISBN978-4-8021-3131-5
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©KENICHI YAMASHITA,RIRI SAGARA 2018 ©2018 FIELD-Y
発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks


数分前に導力ネット経由で同じサーバーにアクセスした端末があるわ
もしかすると
いいだろう 多少のリスクはしかたあるまい
だが念の為に変声機を使いたまえ
はいはい
あーあー もしもし？
そこに誰かいるはずよね？
こちらの声は聞こえるかしら？
Fortsetzung folgt


空の軌跡SC
~絆の在り処~
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
見事な交渉でした! クローディア姫殿下!
あ!
やっぱり
あなたでしたか


カシウス准将
な なんでまた父さんが…
なんでこんな都合よく現れるのよ!?
かねてからラッセル博士たちが進めてくださっていたアルセイユの改造がようやく終わってな
姫殿下がおひとりで帝国軍に立ち向かわれたとの連絡を受けて
急ぎ助太刀にと馳せ参じたというわけだ



殿下…
王都襲撃の件は聞きました…
王室親衛隊としての責務を果たせず本当に申し訳ありませんでした
アルセイユ用の大型零力場発生器の開発が思った以上に難航してのぅ
皆で完成を急いだんじゃが
遅くなってしまってすまんかったの
でもすごいナイスな登場だったわよ！
よかったぁ
そっかー
あんなタイミングで飛んでこられたらいくら帝国軍でも引き下がるしかないもの
えっ
こんな切り札持ってたなんて
クローゼも策士なんだから
いいえ
あれも…
おーい
おーい
やぁ
みんな
ご苦労様だったねぇ
オリビエ!?
なによあんた！
帝国の皇子様じゃなかったの!?
もう一体何がどうなってるわけ!?
実は
恥ずかしながら
帝国内に怪しげな陰謀が進行していたのでね
ボクだけでは無理だったからひとつ王国軍に協力してもらって帝国軍の出鼻をくじいてやったわけなのさ
なに言ってんのよ
帝国の問題に首突っ込むよーな人間が王国軍にいるわけない…
…………


まさか…
オリビエと父さんは最初からグルで…
はっはっは
帝国軍と一緒にあたしたちまで騙してたって……こと？
なんでそんなややこしいことするのよこの大人たちは！
敵を欺くにはまず味方からというからね
結果的に上手くいってよかったじゃないか
だけどー！
もー！
…でも

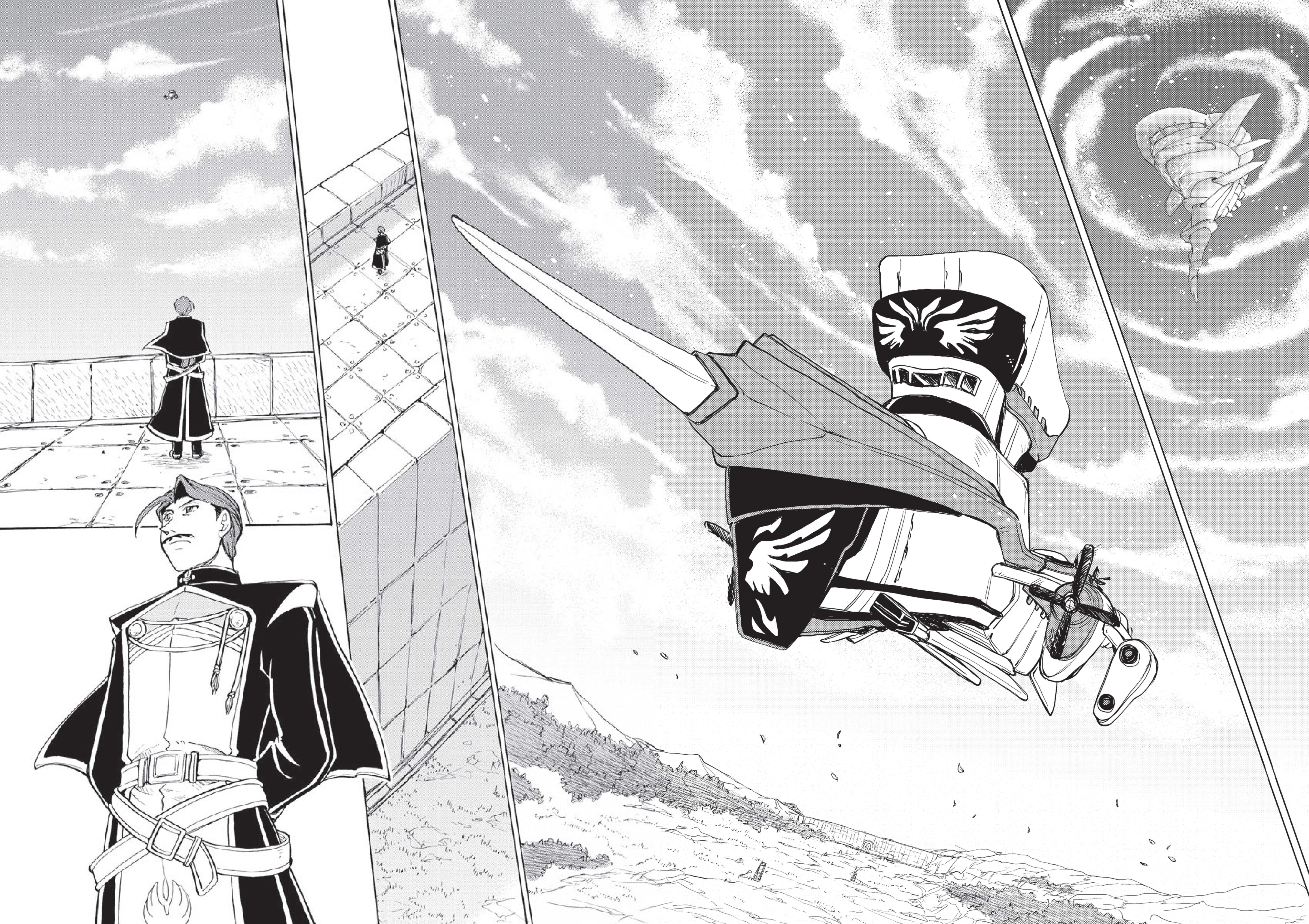

本当に…ありがとうございました
おふたりのおかげでリベールは大きな危機を回避することができました
なにをおっしゃる姫殿下
貴女が危険極まるこの場所に自ら足を運ばれ
大軍勢にもひるまず本気の交渉をなされたからこそ
我々だけでは止めることさえできなかった帝国軍を無血で退かせることができたんだ
貴女のおかげで王国は守られ
我が帝国は過去と同じ過ちを犯さずに済んだ
ありがとうクローディア姫


そんな…もったいないです
私はまだまだ未熟ですし…
……
…でも
皇子がおっしゃってくださったことが私にできたのなら…
それは
ここまで私を支えてくださった
たくさんの方々のおかげですね
あれ？
…え!?
あたしは…
交渉に茶々入れちゃっただけだし…
いやいやいや
守ったっていうなら
ここで帝国軍を食い止めてたモルガン将軍たちの方が…
すごい…
わしらは…
己の仕事をしただけのこと!
労をねぎらいたくば姫様の決意を形にして見せた
わしらはただアルセイユを飛ばせるようにしただけじゃよ
アルセイユの関係者に言うがよい!
まぁ…そのアルセイユがヴァレリア湖に不時着していると導力通信が入ってこなければわしらはなーんにもできなんだがな
だとすれば通信器を直すために王国中を走り回ってくれた者の功績は大きいのぅ


少しでも力になれたなら嬉しいんだが
つっか遊撃士が通信器を直すのに専念できたのは
リベール王国の全員が
このわけわかんねぇ状況で暴動も起こさずじっと辛抱してくれてるからだろ
俺らはいいからそっちの方をほめてやってくれよ
よーするに!
みんながみんなで頑張ったら
なんでもうまいこといくってこっちゃな!


ほんならもうそのみんなで
そもそもの元凶をなんとかしてまえばええんとちゃう?
リベールの災厄の
すべての元凶…
《輝く環(オーリオール)》を!


みなさん！
これより
アルセイユは
ヴァレリア湖
上空に現れた
浮遊物体に
向かいます！
これが
最後の
お願いです
どうか
窮地にある
リベールに
みなさんの力を
お貸しください！
その依頼
あたしたち
みんなで
つつしんで
請けさせて
もらうわ！
必ずや
この事態を
解決して
みせるから！




いいのか？
カシウス
心配なら
一緒に行っても
よかったのだぞ
いや…これで
いいんです
どうやら敵は
思った以上に
危険極まりない人物の
ようですから
私のような
できる男が
同行しようものなら
手段を選ばず
ガチで抹殺しにくる
でしょうからね
う〜ん
おまえもずいぶん
買われたものだな
…逆に
そこに
つけいる隙が
出てくる
はずです


…そうか
ならば
今できるのは
ひとつだけ…
ということか
ええ
レナ
それに
空の女神よ
あの子たちの足元を
どうか
照らし出してくれ



発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp/falcombooks



▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

『創の軌跡』より、ちびっこたちが無敵にかわいいコルクコースターになって登場！

『英雄伝説 創の軌跡』で思い出深い、らくがき風ちびっこ絵の雰囲気を生かした、おしゃれでキュートなコルクコースターが登場。ラピス、アルティナ、キーアがそれぞれに写真を眺める様子がこの上なくカワイイ小物アイテムです。

『創の軌跡』三人娘らくがき絵コースター あるてぃな　『創の軌跡』三人娘らくがき絵コースター きーあ　『創の軌跡』三人娘らくがき絵コースター らぴす



■各715円（税込）
■予約ページ　https://dengekiya.com/shop/e/ekiseki/
■予約期間　2021年5月9日（日）まで
■お届け予定　2021年6月中旬

「東京ザナドゥ」初のGraffArtグッズが登場！

キュートな絵柄が魅力のGraffArtシリーズに、待望の「東京ザナドゥ」が登場しました。

■商品ラインナップ
- ペンケース
- キャラクリアケース（A5）
- デカキャラミラー
- 缶バッジ（ブラインド）
- アクリルぷちスタンド（ブラインド）

■発売日
2021年4月24日（土）

■取扱い店舗
GraffArt SHOP 池袋本店／名古屋店／なんば店

■オンラインショップ
https://kyaragoods.shop-pro.jp/?mode=grp&gid=2050706



OMNI SHOP『創の軌跡』新作グッズ登場！『黎の軌跡』特製クリアしおりのプレゼントも！

工画堂OMNI SHOPより、『創の軌跡』ほかファルコム新作グッズが登場。購入金額3,000円ごとに『黎の軌跡』主人公・ヴァン、ヒロイン・アニエスのイラストを使用した「特製クリアしおり」がプレゼントされます。

■『英雄伝説 創の軌跡』B2タペストリー
4,400円（税込）
エンディングに使用されたイラストがタペストリーとしてグッズ化。生地は発色がよく厚みのしっかりしたディープホワイトで、細部までしっかりと印刷されています。



■『英雄伝説 創の軌跡』トレーディングアクリルフォトキーホルダー第2弾【A】【B】（各全5種）
単品1個：770円（税込）
A、B：各セット　3,850円（税込）
フォトフレーム風のアクリルキーホルダー。
綺麗な景色やスイーツと共に……様々な場面で想い出の一枚を撮ってください！



■『英雄伝説 創の軌跡』缶バッジ3D ver.【A】【B】（各全22種）
単品1個：330円（税込）
お得セット6個：1,650円（税込）
『英雄伝説 創の軌跡』作中のキャラクターモデルを使用した新作缶バッジが登場！



■『英雄伝説 閃の軌跡』マカロンマグ
■ゆるみっしぃ マカロンマグ
各2,970円（税込）
口当たりの良い飲み口になっているほか、真空二重構造によって保温・保冷効果を発揮するので季節を問わず、ご利用いただけます。



トールズ士官学院のエンブレムを使用したクールなマカロンマグ。　ゆるみっしぃのLINEスタンプイラストがキュートなマカロンマグに。

■販売開始日時
2021年4月28日（水）18:00～

■お届け予定
2021年5月11日（火）より順次
※クリアしおりは無くなり次第終了となります

■OMNI SHOP特設サイト
http://www.kogado.com/sw/contents/hotnews/omni_gw2021ymg3h.htm



「イース」シリーズよりオリジナルパーカー、Tシャツなど新作グッズ多数登場！

オリジナルグッズの通販サイト「AMNIBUS」を展開する株式会社アルマビアンカより、「イースⅠ＆Ⅱクロニクルズ」「イースⅧ -Lacrimosa of DANA-」をモチーフにした新作グッズの発売が決定しました。

アクリルスタンド



アクリルキーホルダー



Tシャツ



缶バッジ



パーカー



■予約期間
2021年5月27日（木）まで

■お届け予定
2021年8月上旬より順次発送

■AMNIBUS 商品ページ（イースⅠ&Ⅱ）
https://amnibus.com/products/title/508

■AMNIBUS 商品ページ（イースⅧ）
https://amnibus.com/products/title/505

4月の新／衣装替えキャラクターをチェック！



制服・ノエル

新年度ということでノエルが制服姿で登場。軍人らしくきっちりとした着こなしが多いノエルにしては珍しいゆるめのセーターとシャツ着こなしが、普段とはまた違った印象を抱かせてくれる。

THE LEGEND OF HEROES

暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
４月は新たに、ノエル・シーカーの衣装替えが登場！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

期間限定イベント「ナハトの奮闘記 Vol.11 ロイド編」を実装！

ある日、休日を過ごしていたナハトはミシェルに呼び出され、緊急の手配魔獣討伐を依頼される。
やや不貞腐れながらも現場へ急いでいると、
“あの男”もどこか焦っている様子で同じ方向へ走っていった。
何かただならぬ事情があるに違いない――。ナハトはすぐに彼の後を追った……。









※現在イベントは終了しております。

※画像は開発中のものです。　※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

『創の軌跡』の発売を記念して

『軌跡』シリーズの原点を振り返る！



©MIYABI HASEGAWA , WADARCO

英雄伝説 空の軌跡3 ～王都繚乱～

第4回

リベール王国を舞台とした『英雄伝説 空の軌跡』、クロスベル自治州を舞台とした『英雄伝説 零の軌跡』と『英雄伝説 碧の軌跡』。そして、エレボニア帝国を舞台とした『英雄伝説 閃の軌跡』。これまでゼムリア大国西部の各国を舞台として物語が紡がれてきた『軌跡』シリーズだが、最新作『英雄伝説 創の軌跡』は、これまでのシリーズに登場したキャラクターや世界観をより掘り下げていく作品ということで、シリーズの原点ともいえる第１作『英雄伝説 空の軌跡 FC』ノベライズを好評連載中！

製品情報

好評発売中

著　　　　:はせがわみやび
イラスト:ワダアルコ
定　　価:1,400円(税別)

英雄伝説 零の軌跡

午後の紅茶にお砂糖を

FB ファルコムBOOKS

著者:むらさきゆきや
イラスト:窪茶



日本ファルコムの大ヒット RPG『英雄伝説 零の軌跡／碧の軌跡』の主人公【特務支援課】は意外とまったり !? 本編とはひと味違った彼らのゆる～い毎日を描いて『月刊ファルコムマガジン』で大人気を博したノベライズ作品が単行本で登場！

好評発売中!!

定価:1,100円+税
ISBN:978-4-89610-255-0

発行:フィールドワイ
発売:メディアパル

フィールドワイのHPはこちら → www.field-y.co.jp

第十五幕　ラッセル博士の捜索

　辿り着いたのは夜明けだった。
　国内に四つあるという古代文明の遺跡《四輪の塔》。そのうちの一つ《紅蓮の塔》は、アガットの言ったとおりトラット平原道の北にあった。街道の先、森を割って存在するその塔は、名前の通り、曙の光に緋色に輝いていた。
「ここに……あいつらがいるのね」
　エステルたち――エステルとヨシュアとアガット――が塔を見つめてから入り口へと駆け寄ろうとしたときだ。
　どこかで見たような狼のような魔獣に襲われた。
　記憶を辿って思い出す。クローネ峠の関所を襲った狼たち。あの狼たちにそっくりだった。あのときは野生の狼だと思ったが、こうして夜明けの光のなかで見れば、単なる狼ではないことは明らかで――。
「時間がねえ、こいつらをさっさと片づけて連中の後を追うぞ！」
　一度は戦った相手だから恐ろしくはなかった。相手の手の内も判っている。三人で戦えばあっという間だった。
「こいつらは戦闘犬（ウォードッグ）だ」
　叩き伏せた獣たちを見下ろしアガットが言った。
「戦闘犬⁉」
「俺は、奴らを調べ始めてから何度もこいつらの襲撃を受けた。無関係な野生の獣なんかであるはずがねぇ！」
　アガットは、倒した狼のような魔獣たちが黒装束たちによって訓練された獣だと言うのだ。
「……ちょっと待って。じゃあ、あの関所がこいつらに襲われたのって……ひょっとして、あんたが居たからなんじゃ……」
「ま、結果的にはな。ちなみに、奴らの調査を俺に押しつけたのはお前らの親父だぞ」
「ええっ⁉」
「そういうことだったんですか。父さんは、前から黒装束たちを追ってたんですね……」
「ああ。俺に押しつけて雲隠れしちまったわけだが……っと、今はそんなことを話してる場合じゃねえ」
　そう言って、アガットが塔を見上げる。黒装束たちはこの塔にいる、はずだ。博士とともに。
　エステルたちは塔に入った。
　以前に昇った《翡翠の塔》がそうであったように、《紅蓮の塔》も時の流れのなかで魔獣の巣窟となっていた。
「いちいち戦ってたらキリがねえ。できるだけ避けるぞ！」
　襲ってきた魔獣たちをあるいは躱し、あるいは退けて屋上へと駆け上がる。手間取ることなく迷うことなく昇れたので、こんなにあっさりと昇れるならティータを連れてきても良かったかもなん

て思ってしまう。
（って、それは油断しすぎ！　気を抜いちゃだめだってば！）
最後の扉を開けたその先には朝焼けの空が広がっていた。そして――。
（――いた！）
黒装束を着た三人の男たちがいたのだ。男たちの足下に気絶しているラッセル博士もいる。
「とうとう追い詰めたぜ」
アガットが押し殺した声で言った。
「な……！　遊撃士ども！」
黒装束たちは横たわっていた博士を抱え上げ、これ見よがしに銃を突きつける。人質にとってきた。往生際が悪すぎる！　エステルは奥歯を噛みしめ棍を握りしめる。
アガットが苛立ちを隠さない声で言う。
「いい加減、あきらめろや。てめえらに逃げ場はねえんだよ。王国軍だって動いてんだぞ！」
その言葉を聞いた黒装束たちは――笑った。
「……クク……」
「ははは……」
（な、なんなの？　こいつら……）
昇りかけている太陽を地平線の近くを漂っていた雲が覆った。
明け方の淡い日差しが隠されてしまうと、空に突き出した塔の上に冷たい風が吹き抜ける。うなじに、冷えた清水を押し当てられたかのように、エステルはぶるりと身震いをしてしまう。
アガットが笑い出した黒装束たちを睨みつける。
「……なにがおかしい？」
「いや、なに。おめでたい連中だと思ってな。それに……。そろそろ時間だ」
黒装束が言うのと、エステルの耳が空気を切り裂いてやってくる危険な音を捉えたのは同時だった。殺気を感じる。
「エステル！」
「わかってる！」
飛び退く。
激しい音とともに屋上の石の床を削って砲弾が次々と着弾した。欠けた石の欠片が礫となってエステルたちの視界を覆う。
（これって……！）
顔を塔の外へと向ける。砲弾のやってきた方へと。
黒装束たちの背景にはそれまで青い空しかなかった。だが、重い振動音を響かせて、塔の下の方から徐々に『それ』が迫りあがってきて姿を見せる。
巨大な翼をもつ樽のような機体が青空を切り取った。
「やっぱり、飛行船！」
しかも武装船だ。砲塔がまっすぐにエステルたちに向けられていた。動けば撃つと威嚇している。

エステルはぐっと奥歯を噛んで動き出そうとする自分の身体を押さえつけた。
飛行船が塔に横付けされ、乗船扉が開く。
黒装束たちは気を失ったままの博士を抱え上げた。だが、エステルたちは動けない。砲塔との睨み合いが続いている。
このままではまた逃げられてしまう。泣いていたティータの顔が頭をよぎった。
「フフ……形勢逆転だな。ここで皆殺しにしてもいいが、遊撃士協会を敵に回すつもりはない。そこで黙って見ていれば命だけは助けてやってもいいぞ」
黒装束の言葉に、エステルの頭にかっと血が昇る。全身の血が逆流しそうだ。
「こ、この〜っ！　言わせておけば——」
「エステル、ここは彼らの言う通りにしよう」
男たちに聞こえないようにヨシュアが小声で言ってきた。
（え⁉　——ヨシュア？）
どういうことだろうと思っていると、アガットも小声でささやいてきた。
「従うフリをしてスキを窺え。爺さんを運び込もうとする瞬間、そのタイミングで一気に突入する」
（そういうことか）
博士を連れ、黒装束たちが飛行船の乗船扉へ向かう。その一瞬だけ、その場にいたすべての黒装束がエステルたちに背中を向けた。
「今だ！」

アガットが合図したときだった。飛び出そうとしたエステルたちの背後から声があがる。
「だ、だめえ〜っ！」
聞き覚えのある叫び声とともに、飛行船の船体に光弾がぶち当たる。
顔だけ振り返らせたエステルの目に映ったのは——。
「ティータ⁉」
「お、おじいちゃんを返してっ！」
再びティータが導力砲をぶっ放した。船体に当てる。
「ガ、ガキが！　調子に乗るんじゃない！」
黒装束の男が手にした小さな銃をティータの方へと向ける。
（——危ない！）
エステルより早く、アガットが動いていた。
「うおおおおおッ！」
ティータを突き飛ばした。
その肩に、放たれた弾が吸い込まれる。赤い血が屋上に散った。
「くっ……！」
「アガット⁉」
「アガットさん！」
意識がアガットへと向いたのが今度はエステルたちの隙になった。

扉の閉まる音に慌てて振り返ったときには遅かった。駆動音を響かせながら、飛行船が飛び去ってしまう。博士を乗せて。
「お、おじいちゃあああん！」
空に、ティータの叫びが響いた。
パンッと乾いた音が鳴る。
アガットがティータに平手打ちしていた。
「おい、チビ。お前が邪魔したおかげで爺さんを助けるチャンスを逃した」
アガットの言葉に、見開いていた目をさらに大きくしてティータが青ざめる。エステルたちが博士の救出の機会を窺っていたのだと、ようやく彼女は気づいたのだ。
「あ……」
「この責任……どう取るつもりだ？」
「ご……ごめ……ごめ……ん……なさ……」
ティータの顔がくしゃりと歪み、瞳から涙がこぼれ落ち始める。
そのままうずくまって泣き出してしまった。
「も、もうやめてよっ！　どうしてティータにそんな酷いこと言うの⁉　ただでさえ、おじいちゃんがさらわれたばかりだっていうのに！」
「だから言ってるんだ」
アガットはきっぱりと言ったのだ。

「……エステル」
エステルの肩に手を置いてヨシュアが止めた。エステルは、見つめてくるヨシュアの顔を見て口を閉じた。
アガットが静かに言い聞かせる。
「おい……チビ。泣いたままでいいから聞け。お前、このままでいいのか？　爺さんのことを助けないで、このまま諦めちまっていいのか？　腑抜けてないでシャキっとしろ。泣いてもいい、喚いてもいいから自分の足で立ち上がりやがれ。てめえの面倒も見られねえヤツが人助けなんざできるわけねえだろ？」
「ご、ごめ……」
「謝るな。謝ってもらいてぇわけじゃねえ」
「うぐ……うっ、うっ……」
「ティータ……」
エステルの声に、ティータがびくりと身体をすくませた。
「ぐす……………大丈夫、だよ……お姉ちゃん……」
嗚咽がゆっくりと収まる。涙の跡をぬぐいながらティータは顔をあげた。
「わたし……ひとりで立てる……」
ティータがそのひとことを口にするまで、アガットは胸の前で腕を組み、口をへの字に結びながらも辛抱強く待ったのだ。

「フン、あいつら飛行船までもってやがったか。報告するから、さっさと街に戻るぞ。ったく、どっかのガキのせいで余計な時間を取っちまった」
　そのくせ、そんなことを言うのだ。
（素直じゃないんだから）
　塔を出て街道へと向かおうとしたところで前を歩くアガットの身体が傾いだ。そのまま地面に崩れ落ちる。ティータの悲鳴があがった。
　アガットの肩を撃ち抜いた弾丸には毒が仕込まれていたのだ！

† † †

　アルヴの霊薬――その薬は身体の免疫力を飛躍的に高めることができる。
　凶弾の毒により一時は危篤状態にまで陥ったアガットだったが、霊薬の力により一命をとりとめた。寝台の上に横たわっていた顔にわずかに赤みがさす。けれどもまだ呼吸は荒い。
「アガットさん、苦しそう……」
　まだ丸一日は苦しむだろうと言われたアガットに、ティータはつきっきりで看病するという。
　ティータを残し、エステルとヨシュアは、新たな情報を得るために遊撃士協会の支部へと向かった。

《紅蓮の塔》の探索から一週間が過ぎていた。
「妙な雲行きになってきたわ」
　支部の受付でキリカが言った。
「妙な雲行きって？」
「博士を乗せていった飛行船について、なにか判ったんですか？」
　ヨシュアの問いかけにキリカが首を横に振る。
「いえ、そちらはまったく。妙な雲行きというのは、王国軍の動きについてよ」
　王国軍の司令部があるレイストン要塞と連絡がつかなくなり、さらに各地に敷かれていた検問が昨夜のうちにすべて解除されてしまった。検問が解かれてしまっては、黒装束たちがどこに行ったのか、ますます判らなくなってしまう。
　王国軍内部で何か事件が起こったのかもしれない、とキリカは語る。
「何かって……。あ、ひょっとして……！　ドロシーが撮った、あの!?」
「工房から変装して出てきた黒装束の男たちの写真だね。あれは王国軍に取り上げられてしまったけれど、あそこから何か判ったのかな？」
　手掛かりをつかんだからと言って、検問を解く理由にはならないはずだけど、とヨシュアは訝しみつつも口にした。
「あの～、わたしの名前、呼びました～？」
　背後からの声に振り返る。

「あ、ドロシー！」
噂をすれば影だ。リベール通信のカメラマン・ドロシーだった。
入り口から入ってきたドロシーが肩を落としてため息をついた。
「いや～、まいっちゃったよう。編集部に連絡したらちょうどナイアル先輩がいてですね。感光クオーツを王国軍に渡したことを話したらものすごく怒られちゃったの」
そう言って怒られたときの先輩記者の声真似までしてみせた。あまり似ていない。ドロシーのほんわかした声で怒鳴られてもちっとも怖くない。
「ひどいよね～？　わたしだって何もしてなかったわけじゃなくて、レイストン要塞まで返してもらいに行ってですね～、ダメだったけど」
「わざわざ要塞まで行ったの!?　うわ～。あんたも根性あるわねぇ」
「えへへ～。それだけがわたしの取り柄だし。仕方ないから、雑誌掲載用に要塞の写真を撮ってきちゃった。探照灯(サーチライト)でライトアップされてすっごく可愛く撮れたんだよ～」
「よ、要塞を可愛く撮ってもねぇ」
オーバルカメラの天才による相変わらずの物言いにエステルはなんでこんな会話になったんだっけと思わず自問してしまう。そう確か、黒装束の男たちの写真のせいで王国軍に妙な動きがあるとかないとか……。
「それに、許可なしに軍事施設を撮影したらマズイような……」
ヨシュアも呆れた声で言ったのだけど、ドロシーは聞いていないようだった。腰にくくりつけた小さな鞄から一枚の写真を出して見せてくる。
「ほらぁ、見て見て。さっき現像したばかりなの」
ドロシーがカウンターの上に写真を置いた。
「へえ、きれいに撮れてる」
ヨシュアが感心していた。
「ほんと、ドロシーってカメラの腕は大したもの……あれ？　これって……」
写真に映っているあるものをエステルが指摘すると、その場の全員が息を呑んだ。
レイストン要塞を撮った写真の隅に、博士を掠った飛行船が映りこんでいたのだ。

† † †

ツァイスの街を東の門から出て、そのまま《リッター街道》を東へ。
半日ほど歩いた先に、街道から分かれて北へと向かう細い道が伸びている。
《ソルダート軍用路》と呼ばれる軍専用の小路である。レイストン要塞はその道の先、ヴァレリア湖畔にあった。
要塞は地面を掘って作られた水路で囲まれており、湖から引き込んだ水が流れている。橋を渡らねば入ることはできない。

橋の手前までやってきたエステルは、正面に見えている門の大きさを見ただけで、ぽかんと口を開けてしまった。

小さな家なら潜り抜けられそうな門だった。

「この要塞は、十年前の戦争でも陥落せずに、反攻作戦の拠点となったそうだよ」

ヨシュアが言った。

「なるほど納得……って感心してる場合じゃないか」

エステルたちは、どうして博士をさらった飛行船がこの要塞の上空で写真に写っていたのかを確かめるために来たのだ。偶然とは思えなかった。なにより、あれだけの大きな飛行船の接近に要塞の見張りが気づかないはずがない。

「難攻不落って言われているのも判る感じだね……」

「うん。なんとか中に入って話を聞いてみたいよね。あれ？　どうしたの？」

なぜかヨシュアがじっとエステルを見つめてきていた。

「僕はいま難攻不落で手強そうって言ったばかりなんだけど……。いや、つくづく君って物怖じしない子だなと思って。さすがは父さんの娘だね」

「む。あたしだっていちおう緊張してるわよ」

そう言い張ってもヨシュアは優しく微笑むだけだった。

橋を渡って、門の前まで進む。

左右を見渡しても門番らしき人が見当たらず。柱に備え付けの拡声器から男の声が聞こえてきた。

自分たちが遊撃士であり、責任者に会わせてほしいと伝える。

不在だと言われてしまった。

（でも、あっさり引き下がるわけにもいかないのね）

拡声器を挟んで押し問答をしていたら、扉が開いて、守備隊長を務めるというシード少佐なる人物が現れた。背後に部下らしき兵士を二人従えている。

シード少佐に対し、エステルは写真を見せて追求してみた。なぜ博士をさらった飛行船がこの要塞の上空にいたのか。

気づいたはずだ、と。

しかし——。

「国境付近を捜索するあまり、本拠地周辺の警戒が疎かになってしまったようだ。湖を北上したということは帝国の仕業の可能性もあるだろう」

「この船が帝国のものだと？」

疑念を顔に浮かべつつヨシュアが言った。

あからさまに怪しかったが、この要塞と飛行船が関係するという決定的な証拠があるわけではない。上空を掠めすぎただけ、うっかり見逃した、と言われてしまえば、それ以上の追求は諦めるしかなかった。

けれど、成果が何もなかったわけではない。

帰りがけに、導力器（オーブメント）を使用している要塞の大扉が閉じようとした中途で止まってしまうという事

件が起きたのだ。
　要塞の兵士たちにとっても予想外の出来事だったようで軽い混乱が起きていた。
　橋を越えて充分に離れたところで、エステルはヨシュアに確認してみる。
「今のって、やっぱりアレ?」
「うん……。たぶん例の現象だろうね」
　導力停止現象。
《黒の導力器》が引き起こす現象に違いない。つまり、要塞の中に《黒の導力器》はあるのだ。あの守備隊長は知っていて何かを隠している。そして——
「ラッセル博士も、あの要塞の中に捕まってる……?」
「しっ、エステル。あまりここで、それ以上を口にしないほうがいい」
「わ、判った」
「とりあえず、ツァイスに戻ってキリカさんに相談してみよう。場合によったら、工房長さんも呼んだ方がよさそうだ」
　橋の向こうのレイストン要塞を睨みつけながらヨシュアが言った。

† † †

　ツァイスの街。協会支部の一階に、エステルとヨシュア、マードック工房長が集まった。受付の

キリカもいる。
「まさかラッセル博士がレイストン要塞にいるとは……。ほ、本当にたしかなのかね?」
「ドロシー嬢の写真と大門前で起きた導力停止現象。この二つをあわせたら、そう考えるのが妥当でしょうね」
　驚きを隠せないマードック工房長に、キリカが冷静に分析してみせた。
「し、しかし、我が中央工房は長年、王国軍と良い協力関係を築いてきた。にわかには信じられん話だ……」
　レイストン要塞は王国軍の本拠地とされている。要塞のなかに博士が囚われているとするならば、博士をさらったのは王国軍ということになるわけで……。
　工房長が信じたくないと思う気持ちも判る。
「問題はこの件に王国軍がどこまで関わっているかです、工房長」
　キリカが言った。
「う……む」
　工房長が唸るような声をあげた。
　ふとエステルは思いつく。
「親衛隊に変装していたって思ってたけど、ひょっとしてあいつらがほんとうに王国軍の親衛隊って可能性もあるのかな?」
「それはどうだろう。たしかにあれだけよくできた制服をどうやって手に入れたのかは気になると

ころだけれど、絶対できないとまでは言えないよ」

ヨシュアが言った。

「じゃあなんでわざわざ手に入りにくいはずの親衛隊の制服なんて……あ、もしかして親衛隊は濡れ衣を着せられたの？」

「可能性はあると思う。王国軍といっても内部は一枚岩ではないんだ。親衛隊は女王陛下自身に忠誠を誓った直属の組織だから、むしろ軍のなかでは例外的だし。もっとも誘惑しにくい、つまり裏切りにくい軍隊、と言えるだろうね」

「裏切りにくい……」

「ルーアンの街で親衛隊の中尉って人に会っただろう？」

「ああ。あのユリアって人ね」

逃亡したルーアンの市長を捕まえるときに手伝ってくれた人だ。名前は確かユリア・シュヴァルツ。男っぽいしゃべり方をする人だったけれど、黒装束の奴らのような嫌な雰囲気は欠片ももっていなかったっけ。

「そっか……。ちょっとあの人が黒幕って言われてもしっくりこないわね」

「王国軍のなかでなんらかの陰謀が進行しているのはたしかに見えるけれどね」

ヨシュアがそうまとめた。

「……どうやら犯人どもの手がかりを掴んだみてえだな」

「え……？」

割り込んできた声にエステルは振り返る。扉を開けて入ってきた声の主は、意識不明になっていたはずのアガットだった。

「アガット!?」

ティータもいっしょにいる。

「よかった……。意識を取り戻したんですね」

ヨシュアの言葉にアガットは力強く頷いた。

「ああ、ついさっきな。起きたら、見慣れない場所で寝かされていたからビビったぜ」

「毒が抜けたばかりだから、しばらく安静にって先生が言ったんですけど……」

「大丈夫だって言ってんだろ。鍛え方が違うんだよ！」

「う〜っ……」

涙ぐみながら非難の目で見あげるティータに、アガットは彼にしては珍しく狼狽えた。

「わ、わかった。無茶はしねえ。しねえってば！　それならいいんだろ！」

「えへへ……はいっ」

涙をぬぐいながらティータが微笑んだ。

アガットはぼやきながらも言葉を続ける。

「それより、俺がくたばってた間に色々と動きがあったみたいだな。聞かせてもらおうじゃねえか」

エステルたちはアガットにこれまでの出来事を説明した。ラッセル博士はレイストン要塞にいる可能性が高い、と。

「お、おじいちゃんがそんな所にいるなんて……」
「しかも、あの黒装束どもが軍関係者だったとはな。フン、正体が判ってスッキリしたぜ。キッチリ落とし前をつけさせてもらうことにするか」
「落とし前っていうと？」
　エステルが訊くとアガットはニッと口の端をつり上げた。
「決まってるだろう。レイストン要塞に忍び込む。博士を解放して奴らに一泡吹かせてやるのさ」
「あ、なるほど。それが一番手っ取り早そうね」
　良い考えだと思ったのだ。エステルも乗り気になった。
　だが――
「そう簡単にはいかないわ」
「へっ？」
「遊撃士協会の決まりとして軍隊には不干渉の原則があるわ」
（ええと、キリカさん？　なに、それ？）
　エステルの困惑を見てとったのだろう。キリカが説明してくれる。
「協会規約第三項。『国家権力に対する不干渉』……『遊撃士は、国家主権及びそれが認めた公的機関に対して捜査権・逮捕権を公使できない』」
「ええと……？」
「つまり、軍がシラを切る限り、こちらに手を出す権利はないの」

「あ、そういうこと。なるほどねー。って、そ、そんなのっておかしいわよ！　目の前で起きている悪事をそのまま見過ごせっていうわけ⁉」
　なによりも、アガットの後ろで心配そうにしているティータの心を思うと、そんな理屈は到底納得できるものではない。
　こちらの反応をキリカは今回も予想していたようだった。
「ただし……この原則には逃げ道がある」
「逃げ道？」
「協会規約第二項。『民間人に対する保護義務』……『遊撃士は、民間人の生命・権利が不当に脅かされようとしていた場合、これを保護する義務と責任を持つ』。これが何を意味するか判る？」
　首を傾げるエステルに代わって、答えたのはヨシュアだった。
「なるほど。博士は役人でも軍人でもない。保護されるべき民間人ですね」
「そ、それじゃあ……」
「あとは工房長さん、あなた次第ね。この件に関して王国軍と対立することになってもラッセル博士を救出するつもりは？」
　キリカの質問に、工房長は真剣な顔で頷いた。
「考えるまでもない。博士は中央工房の――いや、このリベール王国にとっても欠かすことのできない人材だ。救出を依頼する！」

レイストン要塞の飛行船発着場――。
一隻の飛行船が着陸する。工房都市ツァイスの誇る空飛ぶ工房《ライプニッツ号》だ。
後部の回転翼の立てる音が徐々に小さくなり、導力機関の唸りが収まると、船腹にある乗船扉が開いて整備長グスタフが出てきた。
「よおし。降ろせ！」
グスタフの大声に応えるかのように、台座に乗った鉄製の荷箱――コンテナと呼ばれる――が次々と船から降ろされる。
要塞の守備隊長シード少佐が、グスタフ整備長の前にやってきた。臨検のためだ。少佐が命じると、彼の部下の兵士たちが荷箱に生体感知器を向け、工房からの搬入品の検査を始める。
「これも規則なのでね」
少佐が言葉だけは申し訳なさそうに言う。
いつもの手順。何もあるはずがない――と思っていたが、三つ目の箱を調べているときにちょっとした事件が起きた。
「生体反応です！」
部下の言葉にシード少佐が思わず振り返った。部下たちの顔にも緊張が走る。
だが――。

「にゃーお」
開いたコンテナのなかから出てきたのは小さな猫だった。
「なんだよ。アントワーヌじゃねえか。お前、いつのまに紛れ込んでやがったんだ？」
グスタフ整備長が猫を抱きかかえる。
「そ、その猫は……」
「工房に住んでる猫だ。どうやら忍び込んでたみてえだな。いや、すまねえ」
「ふう、そういうことか……。まあ、以後、注意してくれればいい。よし、残りもチェックしろ」
「了解しました！」
緊張から解放された兵士たちの間にもほっとした雰囲気が漂い……。
結局、四つ目のコンテナから後には異常は見つからず、すべてのコンテナの検査が終わると、ライプニッツ号はふたたびツァイスへと向かって飛び立っていった。
守備隊長は、山と積まれたコンテナを見てから、空を見上げた。もう夕闇が迫っていて、あと半刻もしないうちに夜になってしまいそうだ。
「やけに今日は遅い時間に持ってきたな……。お前たち、ご苦労だった。コンテナの搬入は明日にして、今日はもう兵舎に戻るがいい」
少佐の言葉に部下の兵士たちは敬礼を返した。
兵士たちの姿が消えると、発着場の照明も落ちて、後には積み重なったコンテナだけが残る。
コトン、と小さな音。

四つ目のコンテナ――アントワーヌが隠れていた箱の隣だ――の裏側の鉄板が横に滑ると、なかから男女四人が這いつくばって出てきた。狭い荷箱のなかに四人もの人間が隠れていれば、ぎゅうぎゅう詰めもいいところで、息をするのさえ苦しいくらいだったろう。エステルとヨシュア、アガット――そしてティータだった。
「ふう……うまく誤魔化せたみたいね」
「アントワーヌのおかげだね」
もちろん猫をコンテナに潜ませていたのはワザとなのだろう。あれで、一度ほっとしてしまった兵士たちの注意力は、元に戻らなかったのだから。
「ティータ、大丈夫だった？」
「うん、ちょっとだけ頭がボーッとなったけど……。でも、ちゃんと装置を動かすことができてよかった」
そう言うティータの小さな手のなかに握りこまれていたのは、生体感知器を無効にする導力器だった。エステルたちがラッセル工房を初めて訪れたとき、博士が実験していた最新の発明品だ。
その機械を動かせるのは博士とティータだけで、だから、さすがにアガットも今回はティータの同行を反対できなかった。
「まあ、大したもんだ。……来てもらって正解だったな」
それはアガットにしては最上級の賛辞で――
「えへへ」

ティータがはにかみつつも嬉しそうに微笑んだ。
「何を和んでやがる。ここからが本番だ」
建物の陰まで走り寄ってから、アガットが懐から簡素な地図を取り出した。苦労して手に入れた要塞の見取り図。だが、軍事施設だけあって建物の大まかな形しか判っていない。
「俺たちがいるのは飛行船発着場――このあたりだ」
要塞に何度も積み荷を運び込んでいるツァイスの技術者たちが一番よく知っている場所だ。地図上でも、そこそこ詳しく描きこんである。
「これが兵舎、こっちが監視塔で、おそらく司令部と研究棟はこのあたりだろうって話だ」
「闇雲に探している時間はなさそうですね……」
ヨシュアが言った。
夜もそろそろ更けてきて、空を振り仰げば星が瞬いている。見つからずに潜入していられるのも夜の間だけだろうし、博士を見つけた後の脱出する時間も考えなければならない。
「アガットさん。脱出ルートはどうするつもりなんですか？」
「そいつは考えてある。今いる発着場の反対側に湖に出る桟橋がある。爺さんを救出しだい、船を奪って逃げる」
アガットの言葉にエステルたちは頷いた。
「で、どこから調べるか、だが……」
「あいつらは博士を誘拐したときに、《黒の導力器》だけじゃなくて《カペル》も持っていったのよ

ね？　ということは……」
「彼らも、あの導力器を実験したいんじゃないかな」
「俺も同意見だ」
　アガットも同意する。
「ってことは、やっぱり、この研究棟ってのが怪しいわよね」
　当たりをつけた西の研究棟へと建物の陰伝いに進む。《カペル》を動かすには膨大な導力が必要だから、導力を発生させる建物はそれなりの大きさになるはずだ。
　研究棟へと辿りついた。
「ビンゴだ」
　声を押し殺しながらアガットがつぶやいた。
　棟の周囲に黒装束たちが見張りに立っていた。それどころか、建物の脇には例の飛行船も停泊している。要塞の上空を過(よぎ)っただけという言い訳も消えた。
　黒装束たちの見張りを掻い潜って進み、鉄格子の嵌った窓越しに棟のなかの部屋を一つ一つ覗き込んでゆく。
（……いた！）
　様々な装置が壁際に並ぶ部屋の真ん中に、工房から奪われた《カペル》を載せたテーブルがあり
——ラッセル博士がいた。

　だが一人ではない。他に三人いる。レイストン要塞の守備隊長シード少佐と王国軍のカノーネ大尉。そして最後の一人は、《黒の導力器》を手に乗せた——。
（あれは……リシャール大佐！）
　ボース市の事件の時に一度だけ面識があった。王国軍情報部を率いる、キレ者の若手将校と称される人物だ。あの時エステルは、彼に対して、底の知れない人物という印象を持った。王国軍情報部の頂点にいる人物だった。
　リシャール大佐が博士に話しかける声が漏れ聞こえてくる。
『ラッセル博士。本当にありがとうございました。よく、この導力器の制御方法を突き止めてくださった。情報部を代表して感謝しますよ』
『ふん……やはり貴様が黒幕じゃったか』
『誤解して欲しくないのですが、我々はみな、国を憂える一介の軍人に過ぎないのです。それに、事が済めば博士、あなたも解放してあげますよ』
『貴様らの悪事を知る者を解放するだと？　それでも状況は変わらぬと思っておるわけか。フンッ、おぬしたち、よっぽど大それたマネをしでかすつもりらしいな』
　博士の叩きつける挑発の言葉にも、大佐は「今に判ります」と静かに答えた。
「そういうことだったか……」
　アガットがかすかな声でつぶやいた。
　エステルも聞こえた会話の意味を必死に考える。

（今の会話からすると、リシャール大佐は、《黒の導力器》の制御方法を知りたがっていたってことよね。しかも、博士はあの人を『黒幕』って呼んだ。ということは……）
　二人の会話から、今回の事件の黒幕がリシャール大佐なのは間違いないと判った。
《カペル》を盗んだのは《黒の導力器》を調べるためで、ラッセル博士の誘拐も同じ理由からだろう。そして今や分析は終わり、リシャール大佐たちは調査から実行へと舵を切った。調べ終わった《黒の導力器》を利用して何か大きなことを企てていると推測できる。博士の言うところの『大それたマネ』ってやつだ。
（でも、『大それたマネ』ってなんなんだろう？）
　考え込んでいると、部屋のなかにもう一人誰かが入ってきた。
　赤い仮面をつけたアヤシイ男だ。交わす会話からロランスという名前の少尉らしいと判った。
　ロランス少尉がリシャール大佐に向かって語りかける。
「王都（グランセル）で動きがありました。大佐の読み通り、白き翼が網にかかった模様です」
「これでチェックメイトだな」
　赤い仮面の男の報告を聞いて、リシャールたちは博士だけを残して部屋を出て行った。
　今すぐ窓を破って助け出したいところだが、あいにくと窓には鉄の格子が嵌っていて破れそうにない。声を掛けて見張りに気づかれるのも怖かった。
　どこか入り口を見つけて侵入するしかないが……。
（でも、白き翼ってなんのことだろう……？）

「そこにいるのは誰だ！」
　声と同時に、細い探照灯の明かりがエステルたちの目を射る。研究棟の壁に四つの影を落とした。
　エステルの心臓が跳ねる。
（見つかった！）
　警備兵たちが駆け寄ってくる足音が響いた。

†　†　†

「ふう……なんとか脱出できたわね。こっちにはまだ奴らも来てないみたい」
　東の空の底に赤みが差していた。
　手漕ぎのボートでエステルたち五人がヴァレリア湖畔の岸辺へと辿り着いたときには、もう夜も明けそうな時刻だった。
「シード少佐が引き留めてくれているのかもね」
　ヨシュアが言って、エステルも頷いた。
　あの後――。
　警備兵たちを倒し（声をあげさせず、かつ気絶させるだけというのが難しかった）、博士の囚われている部屋まで辿りついたところまでは上出来だったが、そのときにはもう要塞全体に警報（サイレン）が鳴り響いていた。司令部らしき部屋まで逃げたものの、そこから先に繋がる通路はなく、通路の左右

には部屋へ繋がる扉が並ぶだけで、エステルたちは袋の鼠となってしまったかに思われた。
そんなエステルたちに男の声で『こっちだ、来たまえ！』と、ある扉の向こうから声がかかった。
ダメもとで駆け込んだその部屋のなかで待っていたのが——。
（シード少佐だったのよね）
要塞の守備隊長である少佐がエステルたちを匿ってくれたのだ。
それどころか、指令室の一角にある非常脱出路まで教えてくれた。本棚の裏側にあった秘密の抜け穴から、暗く細い道を辿ると、要塞の裏手にある水路に出た。
そこに用意されていたボートを使ってエステルたちはヴァレリア湖へと出た。夜はもう明けそうな時刻だったけれど、エステルたちは幸いここまで見つからずにこれたようだ。
「そんなに悪いひとじゃなかったのかな」
「さあな」
つっけんどんな言い方をしたのはアガットだ。傍らにはティータとラッセル博士もいる。
何故助けてくれるのか、と訝しむエステルたちに、シード少佐が打ち明けたのが軍内部の現状だった。
要塞内でエステルたちを追い回した黒装束たちは、情報部の隠密部隊《特務兵》と呼ばれる人たちなのだと教えてくれた。
王国軍は既にリシャール大佐の率いる情報部によって掌握されていたのだ。
主だった将官は懐柔されるか、さもなくば自由を奪われているという。あのモルガン将軍さえ、

ハーケン門に監禁されている状態なのだった。
「モルガン将軍が監禁されているっていうことは、リシャール大佐が王国軍のトップってことだからな。誰も逆らえねえってことだろう。……女王の親衛隊を除けばな」
「それで親衛隊に濡れ衣を着せたんですね」
アガットの解説にヨシュアがなるほどと頷いた。
親衛隊は女王陛下の直属の部隊だから、軍からは独立している。軍を掌握できても親衛隊だけは抵抗勢力として存在する。それを見越して、親衛隊の格好をして博士を誘拐したわけだ。
「シード少佐の言葉を信じるなら、王室親衛隊は、現在、反逆罪の疑いを掛けられて手配中だそうじゃからの」
博士の言葉にエステルは唇を噛みしめる。
「ぜんぶ計算済みってことよね……」
「うん。恐ろしいくらいに頭の切れる人物だよ。あのリシャール大佐って人は」
「でも、いったいなんのためにそんな恐ろしいことをしてるのかな……？」
ティータがぶるりと身体を震わせながら言った。
（そう……そこがまだ判らないのよね。リシャール大佐の目的……）
だが目的がなんであれ、罪もない博士を誘拐し、ティータを悲しませるようなこんな非道を許しておいて良いはずがない。
平和だと思っていたリベール王国。

けれどもエステルたちの知らない間に、裏では大変な事態が進行しているようだった。
おそらくそれにはエステルの父も関わっている……。
（いったい何がこのリベールに起こってるの……）
「そろそろ動こう。グズグズしていたら追跡部隊が編成されると思う。どこか安全な場所に博士たちを逃がさないと……」
ヨシュアの言葉にエステルは顔をあげた。そうだ。まだ逃げ切れたわけではなかった。
「……おい。お前らはここで手を引け」
アガットが唐突に言った。
「え……！」
「どういうことですか？」
エステルとヨシュアの二人を交互に見つめながらアガットが口を開いた。
「今回の一件で、俺は完全に連中に厄介者としてマークされただろう」
黒装束の見張りを気絶させたときも、相手はアガットの名前だけは正確に言い当てていたのだ。
「《重剣》のアガットは凄腕遊撃士として知られていますからね」
「悪名かもしんねえがな。そして、爺さんとティータも同じように追われ続けるはずだ。逃げるついでに、二人まとめて安全な場所まで逃がしてやるよ」
「そういう……ことですか。分散したほうが危険は避けられる、と？」
「ああ」

「ちょ、ちょっと待ってよ！　あたしたちだけ蚊帳の外ってわけ！　そんなのできるわけ……」
「いや、エステル。ここはアガットさんが正しい」
「へっ……？」
「潜伏行動は人数が多くなるほど見つかりやすくなるんだ。博士とティータを安全に逃がしたいならば、アガットさんだけのほうがいい」
「さすがだな、ヨシュア。よく判ってるじゃないか」
もちろんエステルに納得できるはずがなかった。だが、理性はヨシュアの言うことを聞くべきだと告げている。
「り、理屈は判るんだけど」
「ふむ。自分たちだけが安全なのが納得できんか。ならば、わしの代わりにある仕事を引き受けてくれんか？」
ラッセル博士が唐突に言い出した。
「え……」
「王都に向かって欲しい。そして、グランセル城にいるアリシア陛下と面会して欲しいんじゃ」
「ええ!?　じょ、女王様に面会～!?」
アリシア陛下に《黒の導力器》についての情報を直接伝えてほしい、と博士は依頼してきたのだった。
「要塞に囚われていた間に聞いたんじゃが……あの《黒の導力器》は元々リシャール大佐がどこか

で手に入れたもののようなんじゃ。それを誰かが回収してカシウス宛てに送ったようじゃな。大佐はあれを使って王都で何かをしようとしておる」
「王都で……」
「わしのカンが正しければ……非常にマズイことが起きるはずじゃ。その事を陛下に伝えて欲しくてな」
稀代の天才技術者が言う「非常にマズイこと」とはいったい……。
「ひょっとしたら王国の存亡に、いやこの大陸の未来に関わるような事じゃ」
「なっ……！」
エステルは息を呑んだ。
「それを、僕たちに」
「うむ」
「はあ。……まったくもう。そんな風に言われたら断るに断れないじゃない」
「僕たちでよければ引き受けさせてもらいます」
エステルもヨシュアも、もはや頷くしかなかった。
ふたたびボートに乗り込んだアガットたちにエステルとヨシュアは別れを告げる。
広いヴァレリア湖をさらに東へと回ってから上陸する予定だと言う。運がよければ、またどこかで会えるかもしれない。
朝焼けの光が差し込むなか、小さなティータの振る小さな手をエステルとヨシュアは黙って見送っていたが……三人の影はしばらくすると、まだわだかまる闇のなかへと消えてしまった。
もう穏やかな湖面しか見えない。
東の空が赤く染まり、辺りの風景が少しずつはっきりしてくる夜明けの街道を歩いて、エステルとヨシュアはひとまずツァイスの街へと戻る。
かくして、謎の導力停止現象に端を発したツァイス地方の旅はエステルたちにとって思いもよらぬ形で終わりを告げた。
エステルとヨシュアは深まる謎の答えを求めて王都グランセルを目指す。
だが、その地でさらなる別れが待っていることを、このときのエステルはまだ知る由もなかった。

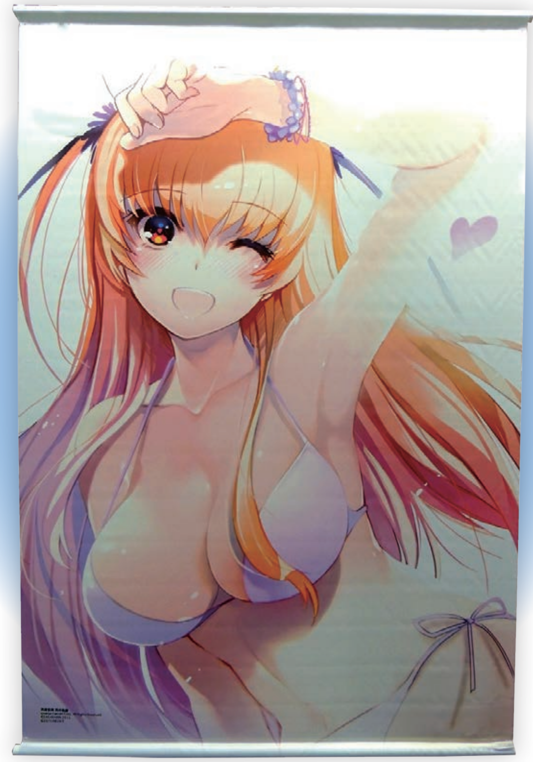


月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.123

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



1名様

英雄伝説『閃の軌跡』アリサ 超どデカB1タペストリー

アリサの笑顔が眩しい、さがら梨々先生のイラストを使用した超貴重な特大タペストリーを1名にプレゼント！

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、(falmaga@field-y.co.jp) まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.123プレゼント係
1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→（記事一覧から１つずつ）
3：アンケート① 今月から新年度！
　　同級生になりたいキャラクターは？
　アンケート② 上司になってほしいキャラクターは？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：も～っと集まれ！ファルコム学園
2：創の軌跡　THE MISERABLE SINNERS
3：英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～
4：ファルコムニュース
5：暁の軌跡最新情報
6：英雄伝説 空の軌跡

応募締め切り　5月29日（月）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。